

島原市文化財調査報告書 第15集

森岳城跡IV

—島原拘置支所宿舎建設に伴う発掘調査報告—

2015

長崎県島原市教育委員会

島原市文化財調査報告書 第15集

森岳城跡IV

—島原拘置支所宿舎建設に伴う発掘調査報告—

2015

長崎県島原市教育委員会

発刊にあたって

一般には、島原城として知られる森岳城跡は島原のシンボルとして市民はもとより、観光客にもその白亜五層の天守閣が親しまれていますが、城全体の規模は東西190.5間(約344.8m)、南北660.5間(約1,195.5m)という巨大な城郭です。

この度、島原拘置支所職員宿舎の建て替えに伴い発掘調査を行い、堀の水を排水した石組暗渠と、大手門枡形の石垣の一部を発見することができました。江戸時代の城の構造を知る上で重要な発見となりました。

森岳城跡の考古学的な研究は未だ緒についたばかりであり、今後、調査例の増加を待つて一層の検討を加えて行きたいと存じます。

最後になりましたが、この度の調査にあたり、全面的なご理解とご協力をいただきました長崎刑務所の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成27年3月

島原市教育委員会
教育長 宮原 照彦

例 言

1 本報告は2014(平成26)年に実施した島原拘置支所宿舎建設に伴う長崎県島原市城内に所在する森岳城跡の緊急発掘調査の報告である。

調査は法務省矯正局長崎刑務所の依頼を受けて、島原市教育委員会が実施した。

2 調査は2012(平成24)年9月12日から9月14日まで範囲確認調査を実施し、その結果を基に2014(平成26)年5月26日から7月11日まで発掘調査を行った。

3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体 島原市教育委員会

教育長 宮原照彦

社会教育課 課長 松本恒一

主査 宇土靖之〔調査・整理担当〕

肥前島原松平文庫学芸員 吉田信也〔文献担当〕

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

長崎支店長 山口勝也 本社調査課次長 城野一郎

本社調査課主任 堀浩一朗〔調査・整理担当〕

4 発掘調査及び関連作業は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、表土掘削は城谷淑朗(株式会社三青)が行った。測量・グリッド杭設置は同社の中尾陽介・松本祐子が担当し、遺構実測は中尾・伊藤博樹・松本が行った。航空写真撮影は藤田勝一(株式会社ふじた)、遺構写真撮影は宇土・堀が担当した。遺物実測は野田典子・堤圭子・光石逸子・末吉由紀子・中村直子・遺構図・遺物図デジタルトレースは古賀栄子・村上久美子・永田里美が担当した。

5 発掘調査の掘削作業は木村光江・荒木恵子・森本正利・山下文正・町田敏夫・浅野克巳・倉永利勝・倉永新子・姫田壽文・岩永哲明・筑紫晴道が行った。また、遺物整理作業は荒木郁子・石川たか子が行った。

6 調査の遺物・図面等は島原市埋蔵文化財収蔵庫で保管している。

7 本書の執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節を宇土靖之、第Ⅱ章第2-3節、第Ⅲ章を堀浩一朗、第Ⅳ章を宇土・堀、付編を吉田信也が担当した。また、本書の編集は宇土靖之と堀浩一朗が行った。

凡 例

1 森岳城跡の遺跡略号は「MT」を表記する。また、遺構名はローマ字による遺構分類略号と遺構番号との組合せで表記した。詳細は「第Ⅱ章 第2節」に記している。

2 原則として遺構の測定値はm単位を使用した。

3 表示した方位はすべて平面直角座標系(第Ⅰ系)による座標北(G.N.)である。

4 遺構実測図の縮尺は1/60を基準とし、遺構の状況に応じて適宜その縮尺を設定して掲載した。遺物実測図の縮尺は陶磁器を1/3、瓦を1/4、古銭を1/1で掲載した。

5 土色の表記については『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社)を、出土遺物色の調・胎土には『標準色カード230』(財団法人日本色彩研究所)を基にした。

6 遺物番号については陶磁器・古銭と瓦は各通し番号を付けている。

7 出土遺物に関しては下記の文献の分類・編年・名称を参考にした。

大橋康二 2000「I 九州陶磁概論」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会

中野雄二 2000「波佐見」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会

- 山崎信二 2008「近世長崎の瓦」『近世瓦の研究』同成社
本田秀樹・竹中哲朗・川口洋平・東貴之 2002「森岳城跡」長崎県文化財調査報告書 第166集
櫻木晋一 2005「長崎奉行所跡の出土銭貨」「長崎奉行所(立山役所)跡・岩原目付屋敷跡・炉船町遺跡－歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(下)－」長崎県文化財調査報告書 第183集

なお、調査及び本書の刊行にあたっては以下の方々から御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表します。

地元各位 法務省長崎刑務所 株式会社三青 長崎県教育委員会
市川浩文 北垣聰一郎 副島和明 竹田将仁 田中健一郎 東貴之 松尾卓司 松本慎二
宮武正登 村上伸之 (五十音順、敬称略)

本文目次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査方法	5
第3節 調査の概要	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第1節 遺構と出土遺物	8
第2節 その他の出土遺物	19
第Ⅳ章 考察	24
第1節 森岳城と大手門耕形虎口	24
第2節 水道堀切と石組遺構	26

挿図目次

第1図 森岳城跡位置図(S=1/2,000,000).....1	第20図 SH01堅坑、SH02・03暗渠実測図 (S=1/60).....17
第2図 調査地位置図(S=1/20,000).....1	第21図 SH01出土遺物実測図(S=1/3・1/4).....18
第3図 周辺遺跡分布図(S=1/30,000).....3	第22図 その他の出土遺物実測図1 (S=1/1・1/3).....19
第4図 調査坑配置図(S=1/1,000).....4	第23図 その他の出土遺物実測図2 (S=1/2・1/4).....20
第5図 島原市大グリッド図(S=1/200,000).....5	第24図 森岳城跡範囲図(S=1/7,500).....24
第6図 島原市中グリッド図(S=1/20,000).....5	第25図 森岳城跡航空写真 (昭和30年代撮影).....25
第7図 森岳城跡基本土層模式図.....6	第26図 肥前国島原城絵図.....25
第8図 道構配置図 ·基本土層実測図(S=1/150).....7	第27図 島原市街図.....25
第9図 SW01矢穴実測図(S=1/4).....8	第28図 森岳城図.....25
第10図 SW01石垣実測図(S=1/60).....8	第29図 堀側石垣積み直し箇所図.....26
第11図 SW01出土遺物実測図(S=1/3).....8	第30図 堀側暗渠検出状況.....26
第12図 SD01溝実測図(S=1/150).....9	第31図 水道・暗渠推定図.....26
第13図 SD01出土遺物実測図1(S=1/3).....11	第32図 堀側暗渠内部状況.....26
第14図 SD01出土遺物実測図2(S=1/4).....12	第33図 石組堅坑及び暗渠推定図.....27
第15図 SD01出土遺物実測図3(S=1/4).....13	第34図 市道陥没状況(昭和32年撮影).....27
第16図 SD02石組溝実測図(S=1/60).....14	第35図 市道石組暗渠(昭和59年撮影).....27
第17図 SD02出土遺物実測図(S=1/3・1/4).....15	
第18図 SH01矢穴実測図(S=1/4).....16	
第19図 SH04石積実測図(S=1/60).....16	

表目次

第1表 遺物観察表(陶磁器・古錢).....22	第3表 遺物観察表(軒平瓦).....23
第2表 遺物観察表(軒丸瓦).....23	

写真図版目次

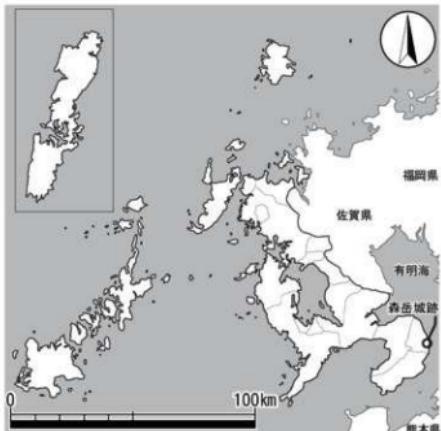
写真図版1	01. 調査地全景(北から).....29
写真図版2	02. 調査地全景(俯瞰).....30
	03. 調査地全景(俯瞰)
写真図版3	04. SW01完掘(北東から).....31
	05. SW01完掘(北から).....31
	06. SW01完掘(東から).....31
	07. SW01完掘(東から).....31
	08. SD01検出(北から).....31
	09. SD01完掘(北から).....31
	10. SD01遺物(西から).....31
	11. SD02完掘(南から).....31
写真図版4	12. SH01～04合成(俯瞰).....32
	13. SH01検出(東から).....32
	14. SH01蓋石除去後(東から).....32
	15. SH01南壁(北から).....32
	16. SH01西壁(東から).....32
	17. SH01北壁(南から).....32
写真図版5	18. SH01東壁(西から).....33
	19. SH01遺物(南から).....33
	20. SH01遺物(南から).....33
	21. SH02完掘(西から).....33
	22. SH02内部(北から).....33
	23. SH02内部(南から).....33
	24. SH03完掘(北から).....33
	25. SH03内部(北から).....33
	26. SH03内部(南から).....33
	27. SH04完掘(南から).....33
	28. SH04完掘(東から).....33
写真図版6	29. 出土遺物①.....34
写真図版7	30. 出土遺物②.....35
写真図版8	31. 出土遺物③.....36

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第1・2図)

森岳城跡が所在する島原半島は長崎県南東部の有明海と橘湾に胃袋状に突き出した半島である。半島の規模は東西24km、南北32km、面積463km²で、中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり、海岸線一帯は島原半島県立自然公園となっている。半島は地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別できる。半島の4分の3を占める雲仙火山群の溶岩円頂丘を中心として北部・東部・南東部に火山性扇状地が発達して、裾野は有明海に延びる。南部の南島原火山地域は第三紀層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地であり、起伏に富む地形をなしている。海岸線の総延長は130kmであり、半島の主要道路・鉄道(島原鉄道)は主に海岸線に沿って走るものと、主要道路の複線として広域農道(グリーンロード)が走る。また、島原半島の1市16町あった行政区画は平成の市町村合併により島原市・雲仙市・南島原市の3市に合併された。島原市は島原半島の北東部に位置し、北に雲仙市、南に南島原市と接する。有明海を隔てて東には熊本県が位置する。

森岳城跡の本丸はもともと小高い丘である「森岳」を利用して築かれたといわれがあるために森岳城の名がある。本丸の標高は29mである。森岳城は海との連絡も視野に入れて築城されているため、海岸までの距離も近く外郭線から300mほどである。城の北側は、以前は沖田原と言われる田園であったが、現在、新道が東西方向に開通し都市化が進んでいる。東側は築城と共に南東部に商家街を築いたほかは北部同様田園が広がっていたが、明治以降、鉄道や国道の開通により都市化が進んでいる。西側は下級武士の住まいとして著名な「武家屋敷」が広がる一帯で、現在も宅地として利用されている。南側は築城以前からの商業地帯で、現在も島原市の商業の中心地帯である。大手門は外郭の南東端にあり、そのすぐ南側には大手川が眉山の麓から東へと流れ外堀的に活用されていたものと推測される。この河口には北から南へと長い砂嘴が延び、この穏やかな入江の内側には塩田や倉、藩の船手が設けられていた。この入江は後に干拓が進められ(現:新田町)現在の地形となる。なお、寛政4(1792)年の島原大変の影響で城の南側の城下町は地形が大きく変わっている。



第1図 森岳城跡位置図 (S=1/2,000,000)



第2図 調査地位置図 (1/S=20,000)

第2節 歴史的環境(第3図)

島原市域には99ヶ所の遺跡が知られるが、大部分が北部の有明・三会地区と南部の安中地区に所在する。縄文時代の礎石原遺跡や弥生時代の景華園遺跡など著名な遺跡がある一方、現在の中心市街地にはほとんど古代遺跡が見当たらない。これは市街地の西側に存在する眉山が、寛政4(1792)年の島原大変と呼ばれる山体崩壊で、近世以前の遺跡を土砂で覆ってしまったためである。また、この山体崩壊の土砂により眉山の東側は海岸線が大きく前進するとともに、大小の島々からなる九十九島を形成、後年は石取り場として利用されたことが文献からも伺え、南天島には矢穴の残る石材が点在している。

歴史資料においては島原という地名の初見が『宇佐大鏡』に見られるほか、中世の史料にも散見される。戦国時代にはフロイスの『日本史』にも良港を擁する町として記載される。天正12(1584)年の沖田畷の戦い時、後の森岳城には有馬の本陣が置かれたとされるが、位置は不明である。また、森岳城跡の西側にある丸尾城跡は猿渡越中守が龍造寺方の鍋島直茂の攻撃を受け激戦が展開されたといわれており、現在は島原藩松平家の菩提寺として本光寺が所在する。当時、島原には有馬氏麾下の在地土豪島原氏が「浜の城」に拠っていたとされる。

こののち島原は有馬領となるが、慶長19(1614)年、有馬直純が日向延岡に転封したのち、有馬領は鍋島・松浦・大村三氏の委任統治領となる。島原は鍋島氏の統治下に入ったが、鍋島氏は「浜の城」を拠点として整備した上で「浜の城は、囲のため堀をほり土手を築きなされ候により、肥前堀と申すなり」(『肥前国有馬古物語』)とあり、森岳城築城まで「浜の城」が機能していたことが看取できる。

元和2(1616)年、大坂の役の功により松倉重政が旧有馬領に入封し、元和4(1618)年、領地の中心として、森岳城の築城を開始した。この森岳城築城により、以後島原が島原半島の政治、経済、文化の中心となった。松倉氏は次の松倉勝家の代に島原の乱が起り責を負って改易され、譜代の高力氏が入封するもこれも二代で改易される。寛文9(1669)年、譜代の松平忠房が福知山から入封し、途中、宇都宮の戸田氏と交替するも再び松平氏が島原に入封して幕末を迎える。

明治以降、森岳城の敷地は官公庁や学校として利用され、郡役所や旧制中学校が建てられた。現在でも国や県の関係機関や県立島原高校、同島原商業高校、市立第一中学校、同第一小学校が立地し、また、三ノ丸以北は住宅地となっているが、外郭線をたどることが可能である。

【参考文献】

- 宇土靖之・竹中哲朗編 2001 「一野遺跡Ⅱ」有明町文化財調査報告書第14集
- 土橋啓介 2001 「島原城外郭遺構について」『西海考古』第3号
- 土橋啓介 2006 「森岳城跡」『島原市文化財調査報告書』島原市文化財調査報告書第11集



第3図 周辺遺跡分布図 (S=1/30,000)

第Ⅱ章 調査

第1節 調査に至る経緯(第4図)

島原市域内一丁目1195番4に島原拘置支所の職員宿舎新営工事が計画されたため、工事を所管する長崎刑務所と島原市教育委員会との協議結果により、平成24年9月12日～9月14日にかけて島原市教育委員会が範囲確認調査を行った。

範囲確認調査は当該地に調査坑を三箇所設定して行った。この範囲確認調査は旧宿舎の解体前に実施したため、調査坑は旧宿舎周辺の駐車場などに任意に設定して調査を行った。範囲確認調査の結果、当該地の北東側のTP3に陶磁器・瓦片が比較的多く出土した部分があったため、この部分について工事の際に島原市教育委員会の立会をお願いし、全体としては、明確な遺構が確認されなかつたため、工事着工に支障は無いと判断した。

その後、平成26年4月から宿舎建設工事が開始された。旧宿舎解体後、基礎杭打設が実施されていたが、4月30日に石組遺構が確認されたとの連絡があった。現地確認の結果、用途は断定できないが江戸時代の遺構であることが想定されたため、長崎刑務所と島原市教育委員会で協議を行い、工事を停止し、発掘調査を行うこととなった。

現地は宿舎建設工事が開始され調査対象地は部分的に工事による掘削が行われている状態であったため、東側225m²を対象として発掘調査を行った。



第4図 調査坑配置図 (S=1/1,000)

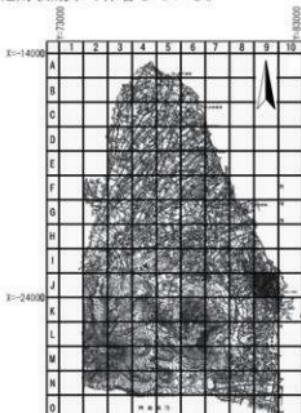
第2節 調査方法(第5・6図)

遺跡名は長崎県遺跡地図に掲載されている「森岳城跡」を使用した。グリッドは平面直角座標系(第1系)を基準に、島原市全域を大・中・小グリッドの3区分を用いて、発掘調査区にグリッド杭を設置した。グリッドの起点はX=-14,000m、Y=73,000mの交点とし、大・中・小グリッドはそれぞれ1,000m四方・100m四方・4m四方を最小単位とした。各々のグリッドの名称は「行名称-列名称」で表記し、南北行が始点より北から南へアルファベット1文字で表示し、始点から南の行へA→B→C…の順に使用した。東西列が始点より西から東へ算用数字で表示し、始点から東の列へ1→2→3…の順に使用した。発掘調査で使用する基本グリッドは小グリッドによる区画で、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、所属不明な遺構検出面で出土した遺物や表面採集遺物などの取り上げ、報告文における遺構説明など、すべて今回設定した小グリッドに基づいて行った。

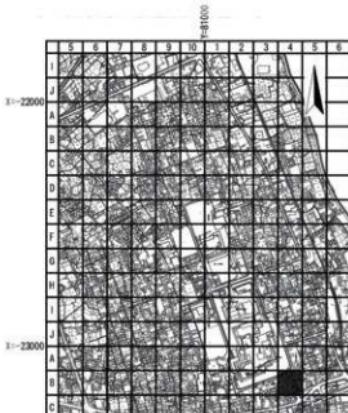
遺構名については次のような表示を採用した。遺構番号はその頭に遺構分類種別略号を付加し最終的な遺構番号とした。この遺構名に使用する遺構分類略号には広域的かつ厳密に統一されたものがないため、ここでは島原市教育委員会による独自の略号を使用した。この遺構分類略号には、SA：柱穴列・礎石列、SB：掘立柱建物、SD：溝・堀、SE：井戸、SH：石組遺構、SJ：集石、SP：橋脚、SS：石敷遺構、SV：石列、SW：石垣、SY：瓦溜り、SX：その他の用途不明遺構、P：小穴・柱穴がある。以上の要件で表記された遺構名は例えば、「SD01」、「SH01」のようになる。

調査はまずバックボウによる表土剥ぎを行った。その後、グリッドを設定して人力による遺構検出を行った。遺構実測は個別遺構図(S=1/20)、堆積土層図(S=1/20)の作成を行い、これ以外の遺構は全体遺構実測図(S=1/20)を作成した。遺構写真は35mm白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用し調査員が隨時撮影を行った。調査区全体写真は6×6判白黒フィルム、6×6判カラーリバーサルフィルムを用いて、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

整理調査は島原市教育委員会の整理場で実施した。遺物の洗浄後に注記作業と接合・復元作業を行い、その後、遺物実測を行った。遺物については資料的価値の高いと判断される公開展示遺物や実測遺物をI種、それ以外のものをII種に分類し、収蔵用のプラスチックコンテナに収納した。I・II種のコンテナを判別しやすいように、I種には赤ラベルを、II種には青ラベルを貼り付け、出土遺構・遺物の内容を明記している。出土資料及び全ての記録資料は平成26年度現在、島原市埋蔵文化財収蔵庫で保管している。



第5図 島原市大グリッド図(S=1/200,000)



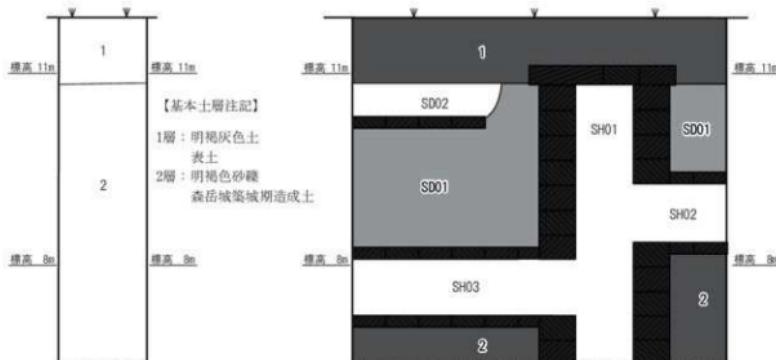
第6図 島原市中グリッド図(S=1/20,000)

第3節 調査の概要(第7-8図)

森岳城跡は島原市内の東に位置し、島原市域内に所在する。森岳城は通称「島原城」とも呼ばれ、松倉重政が元和4(1618)年から約7年の歳月をかけて築城した連郭式平城である。規模は東西190.5間(約343.8m)、南北660.5間(約1,190.5m)のほぼ長方形をなしている。城の平面形状は大きく外郭と内郭に分かれている。外郭は城門7ヶ所、平櫓33ヶ所を備えた堀を巡らせて、内郭は南から順に本丸、二ノ丸、三ノ丸を配し、本丸と二ノ丸は堀で囲まれている。

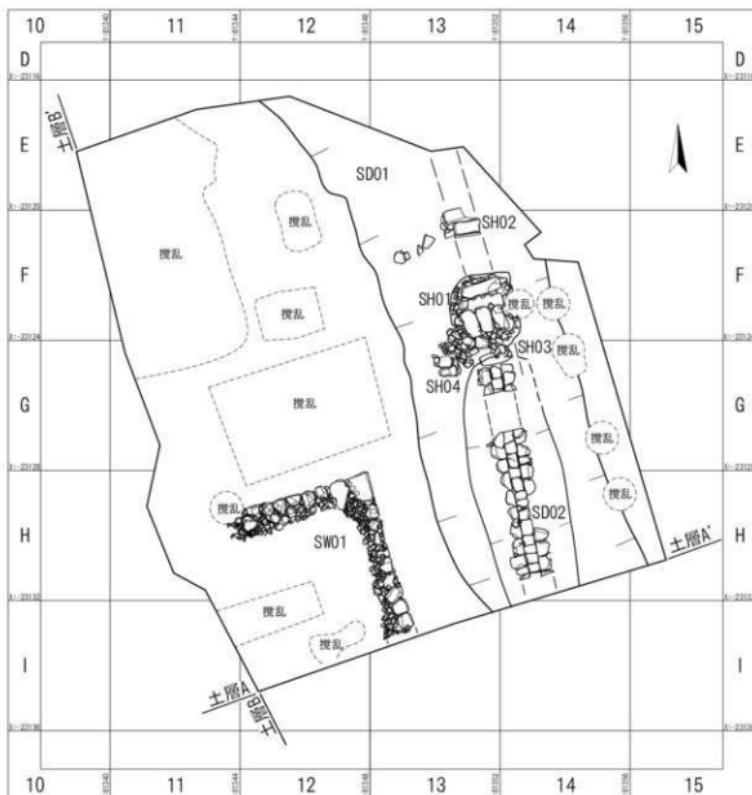
今回の調査地は森岳城の南東部分である島原市域内一丁目119番地4に位置し、外郭7ヶ所の城門の1つである大手門枡形虎口の一部に該当する。調査面積は225m²で、検出面の標高は10.5~10.8mであった。この場所は明治以降、建物が数回建て替わり、昭和30年代からは法務省長崎刑務所島原拘置支所の職員宿舎として利用されていた。

本調査で確認できた近世の遺構・遺物が基本土層第1層(表土)の直下から第2層(森岳城築城期造成土)上面で検出した。主な遺構は石垣1基、溝2条、石組遺構4基であった。SD01は2層から掘り込まれ、その埋土内にSH01~03が構築されている。SD02はSD01を掘り込んで構築しているが、SH01~03とは切り合わない。また、搅乱が著しいために、明確に城内の通路と判る遺構は確認できなかつた。今回確認された石垣は森岳城の大手門枡形虎口の形状を解明する上で重要であり、また、溝及び石組遺構は近世末の普請(土木工事)の一端を把握できる貴重な資料である。島原市は遺構の重要性を考慮し、調査原因者である法務省長崎刑務所へ遺構の現地保存の申請を行つた。二者の度重なる協議の結果、調査地の建設工事設計は変更され、遺構は現地保存されることが決定した。その結果に従い、調査は遺構を土のうで養生し、現地表面まで埋め戻しを行い終了した。



第7図 森岳城跡基本土層模式図

第3節 調査の概要



第8図 遺構配置図・基本土層実測図 (S=1/150)

第三章 遺構と遺物

第1節 遺構と出土遺物

遺構は表土掘削後に、基本土層第2層上面で検出した。本調査において確認できた遺構は石垣1基、溝2条、石組遺構4基であった。遺構に使用された石材は基本、ディサイトである。

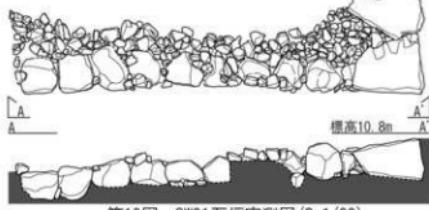
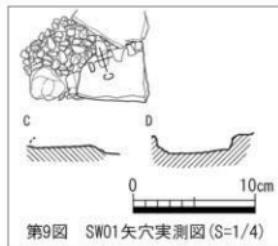
1 石垣

SW01石垣(第9・10図)

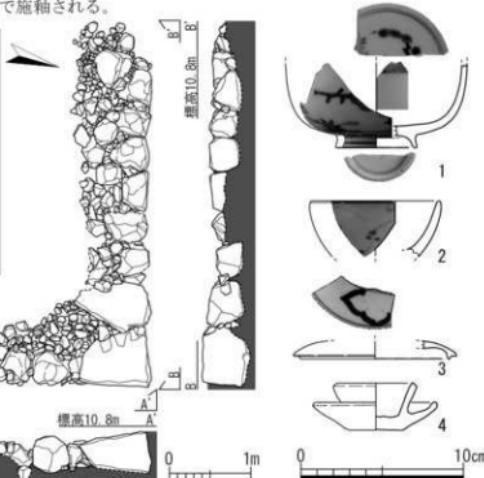
調査区の南西側H・I-11～13グリッドに位置する石垣である。南側は調査区外に延びる。検出面の標高は10.4～10.5mで、規模は東西4.59m、南北5.06m以上、最大高0.60mである。他遺構との切り合は認められない。この遺構の平面配置は隅角部を中心に面石を南北方向に8～9石、東西方向に8石を配している。石材の間には間詰めを行い、背面には5～20cm程の石で裏込めを行っていた。積み方は高さ0.3～0.6mの根石1石分しか残存していないため、上部石積みの形状は不明である。石垣下部に胴木は確認できなかった。隅角部の石材の上面には幅6.1cm、厚み1.3cmの矢穴が3ヶ所確認できる。埋土からは陶磁器片が10点出土した。

SW01出土遺物(第11図)

1は肥前色絵の碗である。残存器高5.2cm、復元高台径5.0cmを測る。高台がやや外に広がる。外面は底部に二重、高台内外に各一重の圓線を施し、体部に草花文を染付後、金と赤の色絵を描いている。内面は口縁部に四方櫛文、見込みに二重圓線を施し、環状の松竹梅文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの軸が剥ぎ取られる。2は肥前染付の小碗の口縁部である。復元口径8.0cm、残存器高3.4cmを測る。外面は梅文を描いている。この梅文は雪輪に梅文の一部である。3は肥前染付の蓋の口縁部である。復元口径10.0cm、残存器高1.1cm、復元かえり径9.0cmを測る。外面は一重の圓線を施し、窓絵を描いている。窓内に文様はない。かえり部に砂粒付着が確認できる。4は肥前陶器の灯明皿である。復元口径5.1cm、器高2.9cm、復元受部径7.7cm、底径3.3cmを測る。受皿のつくタイプで上の皿はやや外開きに直線的に延びる。受皿は器高の3分の2程の高さで、底部は回転糸切りされる。内面から受皿口縁部まで施釉される。



第10図 SW01石垣実測図 (S=1/60)

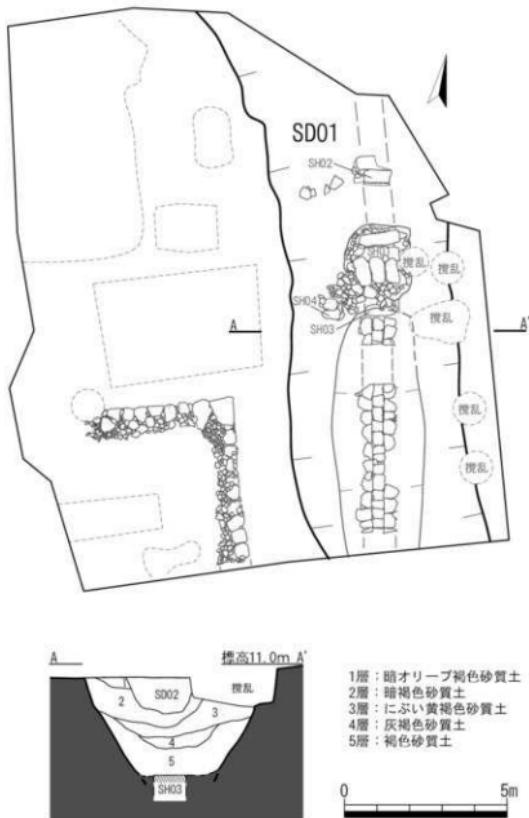


第11図 SW01出土遺物実測図 (S=1/3)

2 溝

SD01溝(第12図)

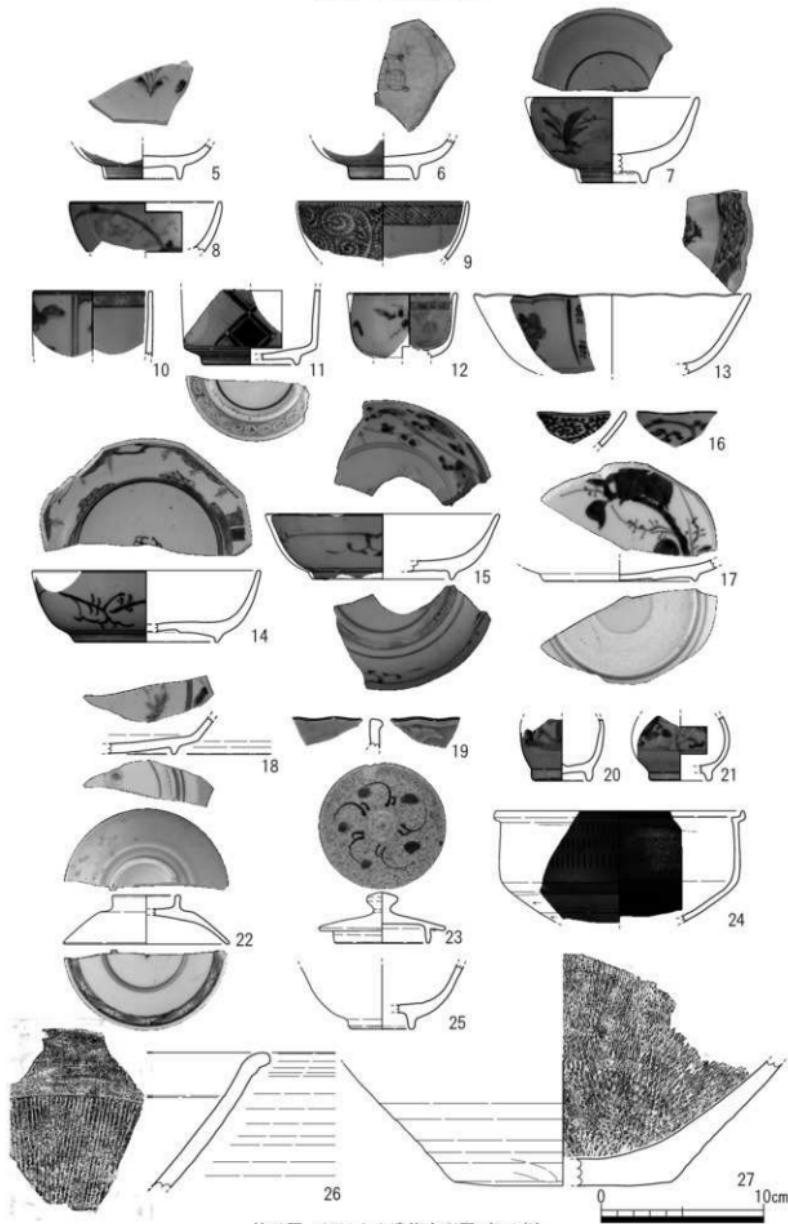
調査区の東側E～I-12～15グリッドに位置し、およそ直線的な溝である。北側と南側は調査区外に延びる。検出面の標高は10.3～10.5mで、規模は長さ17.1m以上、幅4.95～5.13m、深さ3.1m以上である。遺構の切り合は遺構上部をSD02に切られて検出した。この遺構の平面形状は約5m幅で僅かに蛇行はしているもののほぼ直線的に南北に走っており、中心軸に近い位置でSH01～03が確認された。しかし、安全を確保しての掘り下げ作業に伴い掘削面が狭まつたこと、さらに遺構の現地保存が決定したことにより、掘削はSH02・03が確認された時点で中断し、溝の底面までは至っていない。そのため、遺構の明確な断面形状は不明ではあるが、U字もしくは箱形に近い形状ではないかと想定される。堆積した埋土は褐色を基調とし5層に分かれるが、ほぼ同質の砂質土である。また、SH03は5層下位から確認された。遺物は全ての層から出土したが、特に第2・3・5層からは近世の陶磁器片、瓦片が大量に出土した。



第12図 SD01溝測定図 (S=1/150)

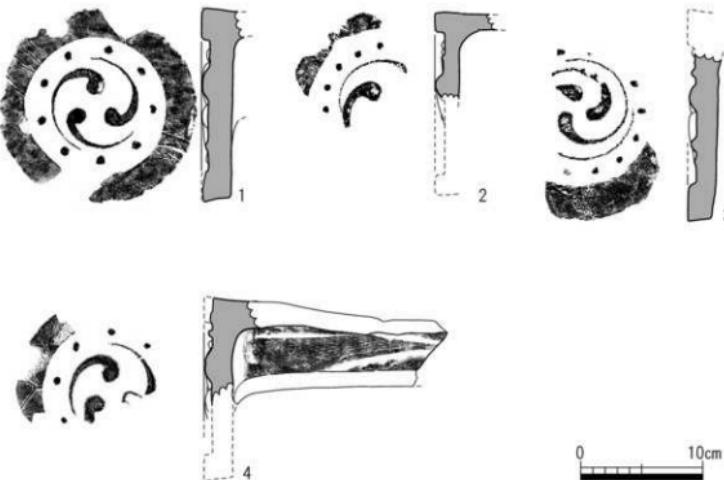
SD01出土遺物(第13~15図)

5~10は肥前染付の碗である。5は残存器高2.2cm、復元高台径4.8cmを測る。外面は一重の圓線を施し、内面は草花文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。内外面に貫入が認められる。6は残存器高2.5cm、復元高台径4.2cmを測る。外面は底部に二重の圓線を施し、○×の連続文を描いている。内面は一重の圓線を施し、見込みに七宝文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。内外面に貫入が認められる。7はいわゆるくらわんか碗である。復元口径10.7cm、器高5.3cm、復元高台径4.2cmを測る。口縁部がわずかに外反する。外面は口縁部に一重の圓線を施し、草花文を描いている。内面は口縁部に二重、見込みに一重の圓線を施し、五弁花を配している。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。内外面に細かい貫入が認められる。8は復元口径9.4cm、残存器高3.1cmを測る。外面は雪輪に梅文の一部である梅文を描いている。9は復元口径10.6cm、残存器高3.7cmを測る。外面は蛸唐草文、内面は四方擗文を描いている。10は筒型碗である。復元口径7.4cm、残存器高4.1cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。外面は松文、内面は四方擗文を描いている。内外面ともに貫入が認められる。11は肥前色絵の筒型碗である。残存器高4.7cm、復元高台径6.0cmを測る。高台が厚く、底部から直線的に立ち上がる。外面は高台内に一重の圓線を施し、体部に染付にて窓絵と、底部に満文、赤の色絵で紗綾形文を描いている。12は肥前染付小杯の口縁部である。復元口径6.8cm、残存器高4.0cmを測る。底部からやや直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。外面は口縁部に一重、底部に二重の圓線を施し、草花と蝶文を描いている。内面は口縁部に雷文を描いている。13は染付の鉢である。復元口径17.0cm、残存器高4.9cmを測る。口縁部は輪花を呈している。外面は口縁部に一重の圓線を施し、線描きで若松文を描いている。内面も線描きで菊文を模倣した文様を描いている。14~17は肥前染付の皿である。14は復元口径14.1cm、器高4.4cm、復元高台径8.9cmを測る。蛇の目凹形高台を呈す。外面は底部に二重、高台に一重の圓線を施し、唐草文を描いている。内面は見込みに二重の圓線を施し、葡萄文を描き、中心に五弁花を配す。15は復元口径14.4cm、器高4.1cm、復元高台径8.8cmを測る。外面は底部に二重、高台に一重の圓線を施し、唐草文を描いている。内面は見込みに一重の圓線を施し、梅文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。16は残存器高2.2cmを測る。口縁は輪花を呈す。外面は唐草文、内面は蛸唐草文を描いている。17は残存器高1.3cm、復元高台径9.4cmを測る。蛇の目凹形高台を呈す。外面は底部に二重、高台に一重の圓線を施し、内面は草文を描いている。18は染付の皿の底部である。残存器高2.3cmを測る。外面は底部に二重、高台内に一重の圓線を施し、内面は見込みに二重の圓線を施し、笹文を描いている。19は青磁皿の口縁部である。残存器高1.8cmを測る。口縁部は輪花を呈す。外面に陽刻を施す。20~21は肥前染付瓶の底部である。20は残存器高3.8cm、復元高台径3.7cmを測る。外面は松竹梅文を描いている。外面施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。21は残存器高4.0cm、復元高台径3.8cmを測る。外面は牡丹文を描いている。外面施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。22は肥前青磁染付の碗蓋である。復元口径10.2cm、器高3.1cm、復元つまみ径4.2cmを測る。内面は口縁部に四方擗文を描き、見込みに二重圓線を施し、五弁花を配している。外面は青磁釉を掛けた。23は陶器の蓋である。ほぼ完形である。口径7.8cm、器高3.2cm、かえり径5.8cm、つまみ径2.0cmを測る。外面は鉄釉と呉須で連続文を描いている。24は関西系陶器の鍋である。復元口径15.5cm、残存器高6.9cmを測る。外面に飛び鮑文を施す。25は肥前陶器の碗である。残存器高4.0cm、高台径4.1cmを測る。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。26は肥前陶器の擂鉢である。残存器高8.3cmを測る。内面には1单位18本の擂目が入れられる。27は備前陶器の擂鉢である。残存器高7.7cm、復元底径13.4cmを測る。内面には1单位12本の擂目が入れられ、内外面とも露胎である。底部は回転糸切りされる。

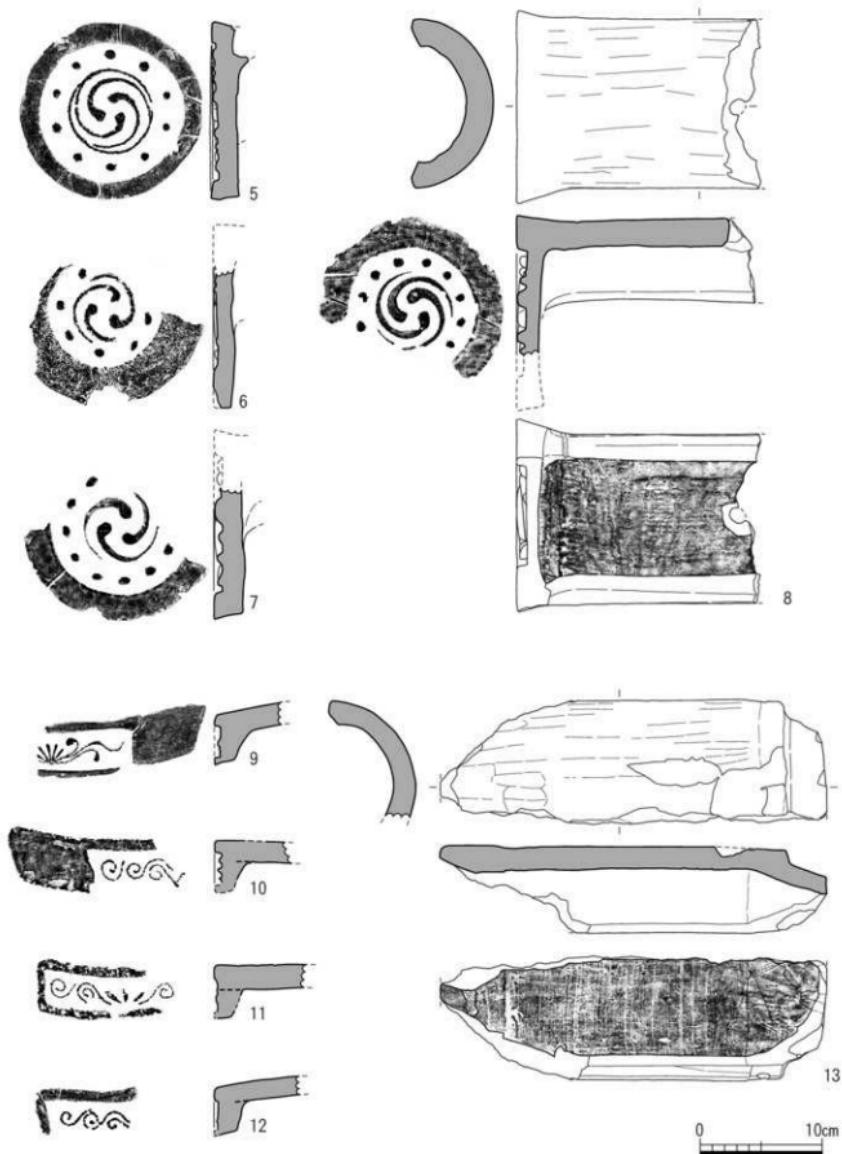


第13図 SD01出土遺物実測図1 (S=1/3)

1~8は軒丸瓦の瓦当である。1は瓦当径15.9cm、周縁幅2.4cm、残存長3.5を測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は9個である。2は復元瓦当径15.0cm、周縁幅1.7cm、残存長5.0cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合し、圓線をなす。珠文は5個残存する。3は復元瓦当径17.4cm、周縁幅2.5cm、残存長2.8cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は8個残存する。4は復元瓦当径15.6cm、周縁幅2.2cm、残存長20.0cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。珠文は5個残存する。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。回面は布目痕、吊り綫痕が確認できる。5は瓦当径14.6cm、周縁幅1.6cm、残存長3.2cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接し、圓線をなす。珠文は10個である。6は復元瓦当径15.0cm、周縁幅3.2cm、残存長1.8cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は6個残存する。7は復元瓦当径15.6cm、周縁幅2.2cm、残存長3.5cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は8個残存する。8は復元瓦当径16.0cm、周縁幅2.8cm、残存長20.0cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は9個残存する。回面は布目痕が確認できる。9~12は軒平瓦である。9は残存高5.2cm、残存長5.6cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは半菊花である。唐草は左3転展開し、巻きは弱い。10は復元高4.3cm、残存長6.4cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは欠損のため不明である。唐草は左右3転展開し、巻きは強い。唐草の展開は下から始まり、2・3転目は上に展開している。11は高さ4.5cm、残存長7.6cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは三葉である。唐草は左右2転展開し、巻きは強い。唐草の展開は下から始まり、2転目は上に展開している。12は復元高4.9cm、残存長7.1cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは欠損のため不明である。唐草は左右3転展開し、巻きは強い。唐草の展開は下から始まり、2・3転目は上に展開している。13は丸瓦である。長さ31.7cm、残存幅10.3cm、高さ7.1cmを測る。回面は布目痕が確認できる。



第14図 SD01出土遺物実測図2 (S=1/4)



第15図 SD01出土遺物実測図3 (S=1/4)

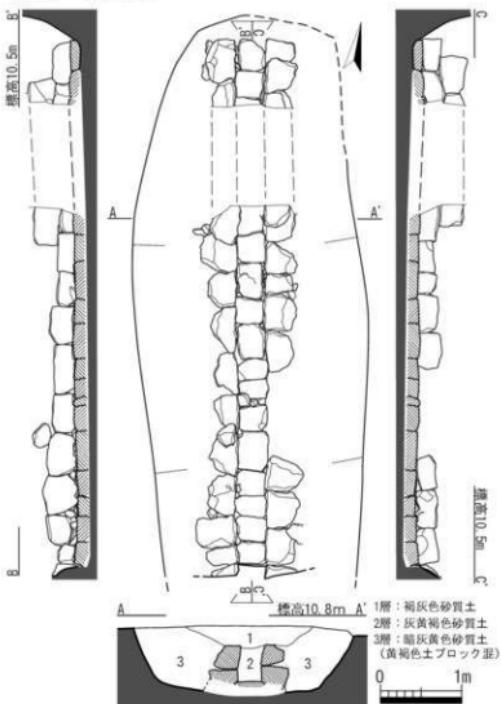
SD02石組溝(第16図)

調査区の南東側G・H-13・14グリッドに位置し、南北に走る直線的な石組溝である。南側が調査区外に延びる。検出面の標高は10.4~10.5mで、規模は長さ6.65m以上、石組部分のみで幅1.05~1.15m、深さ0.7mであり、構築時の掘り込み部分を含めると幅2.51~2.95m、深さ1.25~1.41mである。他遺構との切り合い関係はSD01を切る。平面配置は0.31~0.35mの幅で底部に石が敷かれ、その両側面に石を配し溝を形成する。石材は一部間詰めが行われていた箇所は確認できたが、隙間が空く状態である。また、裏込め及び蓋石は確認できなかった。側面の石の積み方は1石あたり0.4~0.6mの石を1~2石積んでおり、溝の掘り込みの断面形状はU字状を呈す。出土遺物は第2層から19世紀前半の陶磁器片、第3層から18~19世紀の陶磁器片、瓦片が出土した。

SD02出土遺物(第17図)

28は肥前染付の紅皿である。復元

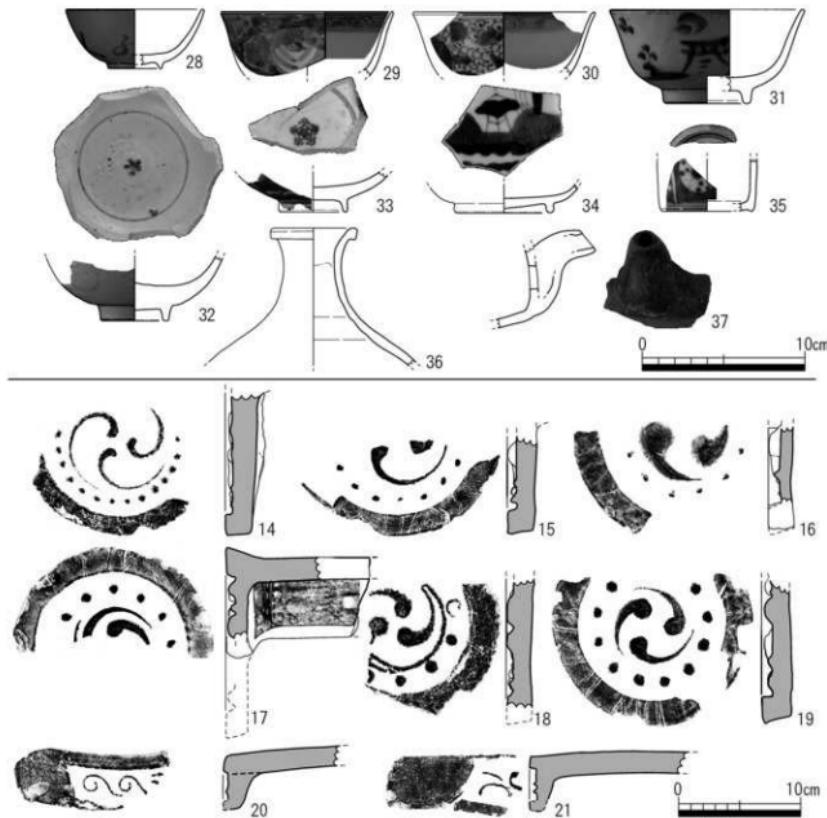
口径8.5cm、器高3.7cm、復元高台径3.3cmを測る。杯状の形状をなし、底部からやや直線的に立ち上がる。外面は「大坂新町お筆紅」銘の内、「大」と「紅」の文字である。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。29~32は染付の碗である。29は肥前の端反碗で復元口径10.6cm、残存器高4.0cmを測る。外面は丸文の中に鳳凰と雲を描いている。内面は口縁部の上下に各二重の圓線を施し、雷文を描いている。30は肥前の端反碗で復元口径11.2cm、残存器高3.9cmを測る。外面は唐草文を描いている。内面は口縁部の上下に二重の圓線を施し、雷文を描いている。内外に細かい貫入が認められる。31は端反碗である。復元口径12.0cm、器高5.8cm、復元高台径5.3cmを測る。外面は山水文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。32は肥前のくらわんか碗である。残存器高4.0cm、高台径4.2cmを測る。外面は丸文と菱文を交互に描いている。内面は見込みに五弁花を配す。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。33は肥前染付の碗もしくは鉢である。残存器高2.5cm、復元高台径4.2cmを測る。外面は高台に二重の圓線を施し、波状文を描いている。内面は見込みに二重の圓線を施し、五弁花を配す。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。34は肥前染付の小皿である。残存器高1.8cm、復元高台径6.0cmを測る。内面は山水文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの釉が剥ぎ取られる。35は肥前色絵の猪口である。残存器高3.2cm、復元高台径5.8cmを測る。外面は雪輪文を描き、内面は見込みに二重の圓線を施す。染付後、赤の色絵を描いている。底部は基盤底を呈し、疊付は露胎となっている。36は陶器の瓶である。口径5.4cm、残存器高8.5cmを測る。37は陶器の土瓶の注口である。残存器高6.0cmを測る。



第16図 SD02石組溝実測図 (S=1/60)

第1節 遺構と出土遺物

14~19は軒丸瓦である。14は復元瓦当径15.4cm、周縁幅1.7cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圏線をなさない。珠文は14個残存する。15は復元瓦当径16.2cm、周縁幅1.8cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圏線をなさない。珠文は7個残存する。16は復元瓦当径16.0cm、周縁幅2.1cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圏線をなさない。珠文は個残存する。17は復元瓦当径15.7cm、周縁幅2.1cm、残存長11.8cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接合せず、圏線をなさない。珠文は個残存する。18は復元瓦当径16.0cm、周縁幅2.3cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合し、圏線をなす。珠文は5個残存する。19は瓦当径15.6cm、周縁幅2.1cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圏線をなさない。珠文は10個残存する。20~21は軒平瓦である。20は復元残存高5.3cm、残存長9.6cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは欠損のため不明である。唐草は2転展開し、巻きは強い。唐草の展開は下から始まり、2転目も下に展開している。21は高さ5.0cm、残存長13.2cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは欠損のため不明である。



第17図 SD02出土遺物実測図 (S=1/3·1/4)

3 石組構(第18-20図)

SH01堅坑(第18-20図)

調査区の東側F・G-13・14グリッドに位置し、平面形状が長方形を呈する堅坑である。SH01は1枚あたりの大きさが幅0.38~0.46m、長さ0.82~1.25mの5枚の蓋石で堅坑の上部を覆う状態で検出された。蓋石を含めた検出面の標高は10.76mである。他遺構との切り合い関係はないが、北壁側にSH02、南壁側にSH03が約1m低く段差をつけて接続する。規模は長軸2.45m、短軸2.01m、深さ2.52m以上である。蓋石を外した平面形状は南北に4石、東西に3石配置しており、背面には5~15cmの石で裏込めを行っていた。東壁側は現代の建設工事の影響を受けて崩落しており、堅坑内部にまでセメント・石灰等の地盤改良用固化材(以下、固化材)が流入し固結していた。積み方は1石あたり0.27~0.33mの高さの石を8石以上上布積みで積まれる。また、標高8.5m以下は固化材が厚く堆積しているため詳細は不明である。掘削作業の安全上、さらに遺構の現地保存が決定したため標高8.2mにて掘削を中断した。同様にSH02・03接続部分についても上記の理由により掘削は行っていないが、壁面の面石の隙間からその存在を確認し、接続することは間違いない。その他、蓋石には幅12.2cm、厚み1.7cmの矢穴が6ヶ所、北面の天端の石材には幅6.1cm、厚み0.8cmの矢穴が3ヶ所確認できる。埋土からは陶磁器片、瓦片が25点出土した。

SH02暗渠(第20図)

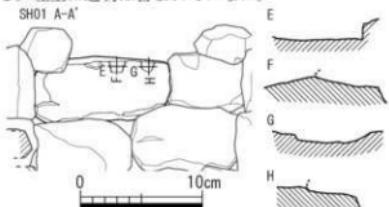
調査区の東側E・F-13・14グリッドに位置し、南北に走る暗渠である。北側は調査区外に延びる。検出面の標高は8.82mで、南端はSH01と接続する。規模は長さ2.1m以上、幅1.17m、深さ0.9m以上である。遺構の現地保存が決定したため、暗渠蓋石が確認された時点で掘削を中断した。内部は目視確認が困難であったためデジタルカメラで内部を撮影するに留まった。その結果、固化材が流入し詳細は不明であるが、流水は確認できなかった。内部の規模は幅0.9m以上、高さ0.9m以上であり、側面は3石以上積まれている。埋土に遺物は含まれていない。

SH03暗渠(第20図)

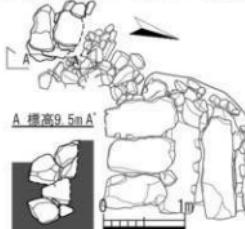
調査区の東側G~H-13・14グリッドに位置し、南北に走る暗渠である。南側は調査区外に延びる。検出面の標高はSH02より約1m深い7.59mで、北端はSH01と接続する。規模は長さ1.09m以上、幅0.99m、深さ0.9m以上である。SH02と同様、暗渠蓋石が確認された時点で掘削を中断し、デジタルカメラで内部を撮影するに留まった。その結果、固化材が流入し詳細は不明であるが、流水は確認できなかった。内部の規模幅0.9m以上、高さ0.9m以上であり、側面は2石以上積まれている。埋土に遺物は含まれていない。

SH04石積(第19図)

調査区の東側G-13グリッドに位置する石積である。検出面の標高は9.29mであり、他遺構との切り合い関係はない。規模は幅0.63m、高さ1.27mである。平面形状は南北方向に2石配置し、1石の高さが0.32~0.45mで4石以上積まれていた。SD01の壁面に沿っており、護岸のための石積みの可能性がある。埋土に遺物は含まれていない。

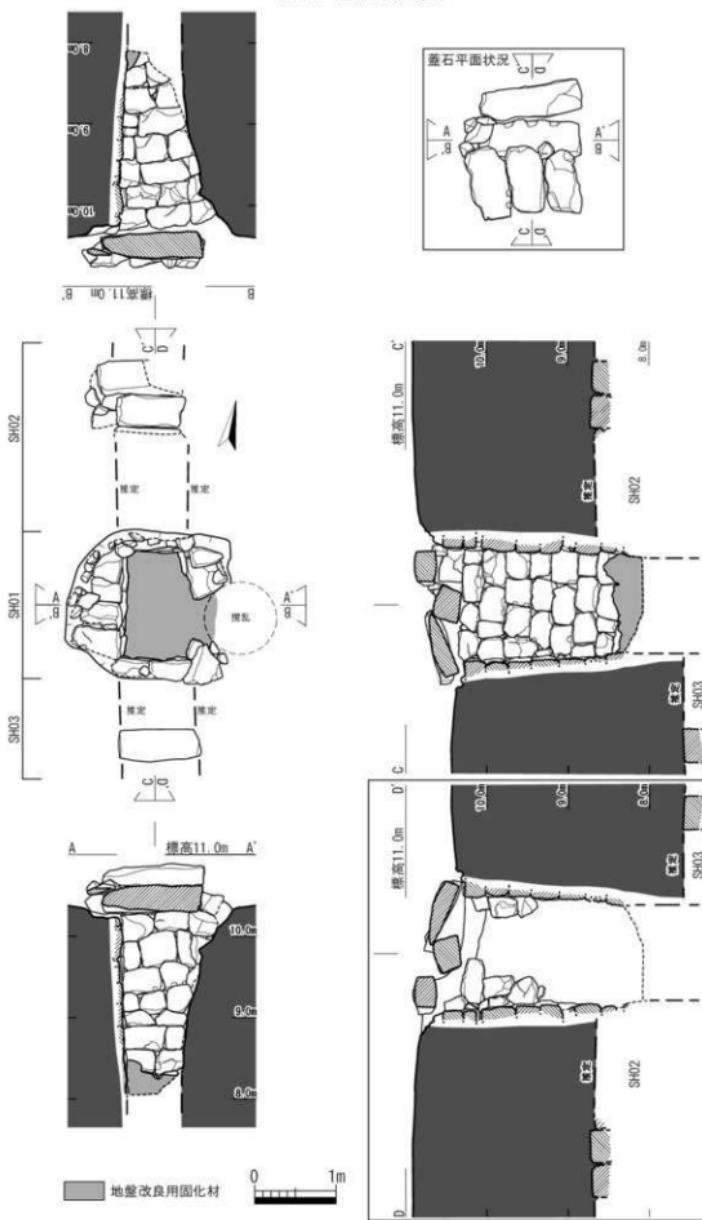


第18図 SH01矢穴実測図 (S=1/4)



第19図 SH04石積実測図 (S=1/60)

第1節 遺構と出土遺物

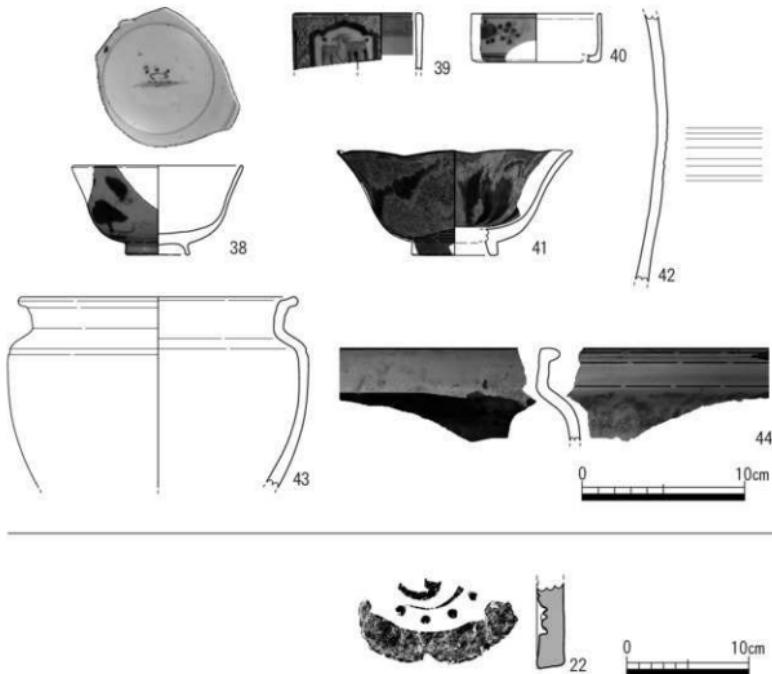


第20図 SH01竪坑、SH02・03暗渠実測図 (S=1/60)

SH01出土遺物(第21図)

38は肥前染付の端反碗である。復元口径10.5cm、器高5.5cm、高台径4.0cmを測る。外面は底部に一重、高台に二重の圓線を施し、草花文を描いている。内面は口縁部に二重、見込みに一重の圓線を施し、岩波文を描いている。全面に施釉後、高台疊付けの軸が剥ぎ取られる。39は肥前染付の筒型碗である。復元口径8.0cm、残存器高3.5cmを測る。外面は窓絵に鳥文、窓絵の周囲は四方擗文を描いている。内面は口縁部に上下各二重の圓線を施し、圓線間に雷文を描いている。口縁部に砂粒付着が確認できる。内外面に貫入が認められる。40は肥前染付の蓋物(段重)である。復元口径8.0cm、器高3.0cm、復元底径7.1cmを測る。底部は甚筒底を呈す。外面は口縁部に一重、底部に二重の圓線を施し、草花文を描いている。全面に施釉後、口縁端部と高台疊付けの軸が剥ぎ取られる。41は陶器の碗である。復元口径14.4～15.1cm、器高6.5cm、復元高台径5.3cmを測る。口縁部は外反し、八角形の輪花を呈す。42～44は肥前陶器の甕である。42は残存器高16.4cmを測る。外面に4条の沈線を施す。内外面施釉される。43は復元口径17.2cm、残存器高11.8cmを測る。口縁部から体部にかけて白泥化粧土を施し、外面に鉄軸と緑軸で松樹文を描いている。

22は軒丸瓦である。復元瓦当径17.2cm、周縁幅2.3cm、残存長2.8cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は4個残存する。ナデ調整を施す。



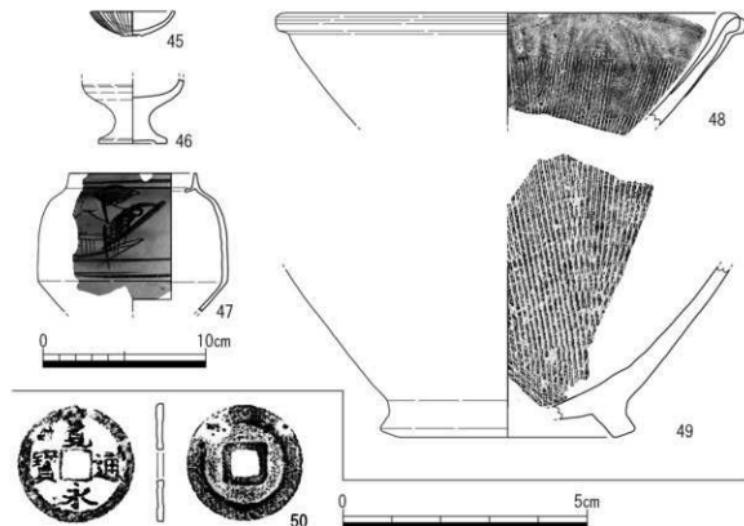
第21図 SH01出土遺物実測図 (S=1/3·1/4)

第2節 その他の出土遺物(第22-23図)

ここで掲載した遺物は表土及び現代の搅乱から出土したものである。

45は肥前白磁の紅皿である。復元口径5.2cm、器高1.5cm、復元高台径1.4cmを測る。外面に貝殻状の型押し成形が施される。口縁から体部内面にかけて施釉され、貫入が認められる。46は陶器の仏飯器である。復元底径4.2cm、残存器高4.0cmを測る。基筒底を呈す。47は陶器の土瓶の体部である。復元口径7.9cm、残存器高8.5cmを測る。外面に山水文を描いている。内面は露胎で外面に施釉され、貫入が認められる。全体的に器壁が薄い。48-49は陶器の擂鉢である。48は復元口径28.6cm、残存器高6.9cmを測る。内面には1単位21本の擂目が入れられ、口縁部は整形して擂目の上端部を揃えている。注口が1ヶ所確認できる。49は残存器高10.5cm、復元高台径15.6cmを測る。内面には1単位17本の擂目が入れられる。高台部に砂粒付着が確認できる。50は銅銭の寛永通宝である。径2.4cm、孔0.6cmを測る。古寛永である。

23~27は軒丸瓦である。23は復元瓦当径14.9cm、周縁幅1.7cm、残存長14.5cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合し、圓線をなす。珠文は16個である。凹面は布目痕が確認できる。24は復元瓦当径16.9cm、周縁幅1.8cm、残存長2.9cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴頭部は細く互いに接合する。巴尾部は接合し、圓線をなす。珠文は10個残存する。25は復元瓦当径15.8cm、周縁幅2.0cm、残存長15.0cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。珠文は12個である。凹面は布目痕が確認できる。26は瓦当径14.5cm、周縁幅2.4cm、残存長2.9cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は16個である。27は瓦当径15.6cm、周縁幅2.4cm、残存長3.4cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は左巻きである。巴尾部は接合せず、圓線をなさない。珠文は9個である。28~31は軒平瓦である。28は残存高5.2cm、残存長4.7cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは三葉である。唐草は左右2転展開し、巻きは弱い。唐草の展開は下から始まり、2転目は上で巻いている。



第22図 その他の出土遺物実測図1 (S=1/1-1/3)



第23図 その他の出土遺物実測図2 (S=1/2・1/4)

第2節 他の出土遺物

29は残存高4.2cm、残存長11.3cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは一葉である。唐草は左右2転展開し、巻きは弱い。30は残存高4.5cm、残存長9.5cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは欠損している。唐草は左右3転展開し、巻きは弱い。唐草の展開は下から始まり、2・3転目は上に展開している。31は残存高4.3cm、残存長12.9cmを測る。文様は均整唐草文で、中心飾りは三葉である。唐草の展開数は欠損のため不明であるが、巻きは弱い。32は軒棟瓦の瓦当である。残存するのは丸部のみである。瓦当径8.5cm、周縁幅1.4cm、残存長5.9cmを測る。文様は三巴文で、巴方向は右巻きである。巴尾部は接合せず、囲線をなさない。33は埴瓦である。残存長9.5cm、厚み2.0～4.2cmを測る。棟を接合した面には刻みをつけた痕跡が確認できる。

34～41は刻印が確認された瓦である。刻印のみを掲載した。34は四角形に「ニに縦線」文である。長軸1.1cm、短軸0.8cmを測る。丸瓦の凸部に刻印されている。35は丸文である。1辺0.8cmを測る。丸瓦の玉縁部に刻印されている。36は菊花文で、連弁数は16枚である。1辺1.4cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。37は菊花文で、連弁数は14枚である。1辺1.5cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。38は花文で、連弁数は12枚である。1辺1.4cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。39は花文で、連弁数は18枚である。1辺1.4cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。40は六角形に「本」である。1辺1.3cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。41は丸に「十」文である。1辺1.2cmを測る。棟瓦の平部に刻印されている。

第三章 造構と遺物

第1表 遺物観察表(陶器・古錢)

拂団号	出土地名 アーチ ガード	種別 器種	出量(実寸)・現存表・単位:cm			色調		焼成 度	胎 土	年代	産地	備考
			口径	器高	底径	その他	釉					
第11回 1	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<2.2	—	青白地 薄口	スカイホワイト マット	薄~マット	魚	—	1780~1800 年代	肥前 外面:草花文 内面:腹方波文、菱竹梅文
第11回 2	H13 0901	縦目部器 筒形	(8.0)	<2.4	—	—	マットホワイト	マット	魚	—	—	肥前 外面:梅文(雪輪に梅文の一部)
第11回 3	H12 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	<3.1	—	からむき 底(5.0) 口(4.0)	スカイホワイト マット	薄~濃	魚	—	19世前半	かさりひな形片付 外腹:草のみ
第11回 4	F13 0901	縦目部器 筒形	(5.1)	2.0	3.3	受凹部 口(5.0)	スカイホワイト マット	やや 良	—	18c	肥前	追加削除し切り離し
第11回 5	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<2.2	—	青の地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	17世後半	肥前 内外面:草花文
第11回 6	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<2.5	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	青白	中 不良	—	18c 前半~ 19c 中半	肥前 内面:○×連續文、内面:七宝文 外腹:模様入
第11回 7	E13 0901	縦目部器 筒形	(8.0)	<2.1	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	薄~濃	魚	—	18世後半~ 19世前半	肥前 内面:五瓣花、外腹:波文
第11回 8	G14 0901	縦目部器 筒形	(8.0)	<2.1	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	など	—	—	肥前 内面:草花文(雪輪の一部)	
第11回 9	F13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	2.7	—	—	スカイホワイト マット	青白	良	—	18世後半~ 19世前半	肥前 内面:四方摩
第11回 10	H11 0901	縦目部器 筒形	(7.0)	<4.1	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世後半	肥前 内面:丸文、内面:四方摩
第11回 11	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<1.7	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	好	—	1730~1800 年代	肥前 内面:鶴の脚文、茎、滴水
第11回 12	G14 0901	縦目部器 筒形	(6.0)	<0.9	—	—	マットホワイト マット	白	好	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文、種々
第11回 13	F13 0901	縦目部器 筒形	(7.0)	<1.9	—	—	スカイホワイト マット	白	好	—	18世~19世 代	肥前 内面:鶴の脚文
第11回 14	G14 0901	縦目部器 筒形	(11.0)	4.0	10.0	青白地 口(8.0)	オフホワイト マット	薄~濃	魚	—	18世後半~ 19世前半	肥前 内面:唐草文、五瓣花
第11回 15	G13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.1	—	青白地 口(8.0)	マットホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:唐草文、五瓣花
第11回 16	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<2.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世後半~ 19世前半	肥前 内面:唐草文、内面:納唐文
第11回 17	H13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.7	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世後半~ 19世前半	肥前 内面:草花文、茎、茎葉
第11回 18	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<2.3	—	—	マットホワイト マット	白	好	—	—	肥前 内面:草花文、種々
第11回 19	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.8	—	—	マットホワイト マット	白	良	—	—	肥前 内面:輪花
第11回 20	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.8	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	白	中 不良	—	18世後半	肥前 内面:草花文
第11回 21	E13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.0	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	白	良	—	18世前半	肥前 外面:牡丹文
第11回 22	G13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	3.1	—	つまみ脚 (1.2)	スカイホワイト マット	白	良	—	1730~1800 年代	肥前 内面:草花文、玉手花
第11回 23	G13 0901	縦目部器 筒形	—	2.8	3.2	つまみ脚 (1.2)	マットホワイト マット	白	良	—	—	少々不良
第11回 24	G14 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	1780~1800 年代	肥前 内面:四方摩
第11回 25	G14 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	—	少々不良
第11回 26	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<0.3	—	青白地 口(5.0)	マットホワイト マット	白	良	—	18世後半	肥前 内面:輪花
第11回 27	S13 0901	縦目部器 筒形	—	<2.7	(13.0)	—	青	青	青	—	—	肥前 内面:草花文
第11回 28	S13 0901	縦目部器 筒形	(8.0)	2.7	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	17世~18世 代	肥前 内面:草花文
第11回 29	S13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 30	G14 0901	縦目部器 筒形	(11.0)	3.0	—	—	マットホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 31	G14 0901	縦目部器 筒形	(12.0)	5.0	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 32	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<1.0	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 33	G14 0901	縦目部器 筒形	—	<2.0	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 34	H13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 35	H13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第11回 36	H13 0901	縦目部器 筒形	3.4	<0.9	—	—	—	—	—	—	—	—
第11回 37	H14 0901	縦目部器 筒形	—	<0.6	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	—	注〇
第21回 38	F13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	5.5	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文、内面:岩文
第21回 39	F13 0901	縦目部器 筒形	(8.0)	<3.5	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第21回 40	F13 0901	縦目部器 筒形	(10.0)	5.0	(7.0)	—	スカイホワイト マット	白	良	—	18世前半	肥前 内面:草花文
第21回 41	F13 0901	縦目部器 筒形	(14.4~ 15.0)	4.5	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第21回 42	F13 0901	縦目部器 筒形	(14.0)	4.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	—	肥前
第21回 43	S14 0901	縦目部器 筒形	(17.0)	<1.8	—	イエロー マット	イエロー マット	—	良	—	18世~19世 代	肥前
第21回 44	F13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.7	—	—	イエロー マット	イエロー マット	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第22回 45	G14 0901	縦目部器 筒形	(15.0)	5.5	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第22回 46	H13 0901	縦目部器 筒形	(14.0)	5.0	—	—	スカイホワイト マット	白	良	—	—	白化粧土 内面:波文
第22回 47	F12 0901	縦目部器 筒形	(12.0)	5.5	—	—	クリーム	白	良	—	18c	肥前 内面:草花文
第22回 48	G13 0901	縦目部器 筒形	(20.0)	<0.9	—	—	マットホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第22回 49	H13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.5	—	青白地 口(5.0)	スカイホワイト マット	白	良	—	18世~19世 代	肥前 内面:草花文
第22回 50	H13 0901	縦目部器 筒形	—	<1.5	—	—	—	—	—	—	—	肥前 内面:草花文

遺物観察表

第2表 遺物観察表(軒丸瓦)

押団 番号	出土地点		法量・特徴 (復元) <残存>									備考	
			直径 (cm)	周縁幅 (cm)	長さ (cm)	瓦当厚		珠文			巴		
						中央 (cm)	縁 (cm)	直径 (cm)	数	頭直径 (cm)	方向	周縁	
第14回 1	G13	SD01・2層	15.9	2.4	<3.5>	2.0	2.5	1.1	9	2.1	左	無	—
第14回 2	G13	SD01・2層	(15.0)	1.7	<5.0>	1.3	—	0.9	<5>	2.1	左	有	—
第14回 3	G14	SD01・2層	(17.4)	2.5	<2.8>	1.8	2.0	0.9	<8>	1.9	左	無	—
第14回 4	F13	SD01・3層	(15.6)	2.2	<20.0>	1.8	—	0.9	<5>	1.8	左	無	—
第15回 5	G13	SD01・3層	14.6	1.6	<3.2>	1.6	2.3	1.1	10	1.3	右	有	—
第15回 6	G-H13	SD01・3層	(15.0)	3.2	<1.8>	1.2	1.5	0.9~ 1.2	<6>	1.3	左	無	—
第15回 7	F13	SD01・5層	(15.6)	2.2	<3.5>	1.7	2.4	1.4	<8>	1.7	左	無	—
第15回 8	E13	SD01・3層	(16.0)	2.8	<20.0>	1.2	2.2	1.3	<9>	1.7	右	無	—
第17回 14	H14	SD02・3層	(15.4)	1.7	—	1.7~ 2.1	2.3	0.8	<14>	1.2	左	無	—
第17回 15	G13	SD02・3層	(16.2)	1.8	—	1.7	2.1	0.9	<7>	1.1	左	無	—
第17回 16	G-H14	SD02・3層	(16.0)	2.1	—	0.9~ 1.1	2.2	0.8	<6>	3.1	左	無	—
第17回 17	G-H14	SD02・3層	(15.7)	2.1	<11.8>	1.0	—	1.3	<6>	1.9	右	無	—
第17回 18	N-H14	SD02・3層	(16.0)	2.3	<2.3>	1.5	2.0	1.2	<5>	1.1	左	有	—
第17回 19	G-H14	SD02・3層	15.6	2.1	—	1.5	2.4	0.6	<10>	1.0	左	無	—
第21回 22	F13	SD01	(17.2)	2.3	<2.8>	1.4	2.3	1.2	<4>	1.9	右	無	—
第23回 23	H14	表土	(14.9)	1.7	<14.5>	2.1	2.6	1.0	16	2.1	左	有	—
第23回 24	F11	表土	(16.9)	1.8	<2.9>	—	—	0.9	<10>	1.6	左	有	—
第23回 25	G13	複乱	(15.8)	2.0	<15.0>	1.2	2.3	1.5	12	2.0	右	無	—
第23回 26	E11	複乱	14.5	2.4	<2.9>	1.8	2.4	1.3	16	1.8	右	無	—
第23回 27	G13	複乱	15.6	2.4	<3.4>	2.0	2.2	0.9	9	1.8	左	無	—

第3表 遺物観察表(軒平瓦)

押団 番号	出土地点		法量・特徴 (復元) <残存>									備考				
			幅 (cm)	長さ (cm)	高さ (cm)	文様区			唐草							
						中心飾り 文様	縁 種類	高さ (cm)	反転数	線種	巻き	子葉				
第15回 9	F13	SD01・3層	(25.2)	<5.0>	<5.2>	半菊花	太	<7.3>	2.4	3	太	側	連續	無	有	—
第15回 10	E13	SD01	—	<6.0>	(4.3)	—	—	<6.7>	2.4	3	細	強	不連	無	無	—
第15回 11	G14	SD01	<14.5>	<7.6>	4.5	三葉	細	<10.2>	2.6	2	細	強	不連	無	無	—
第15回 12	G14	SD01	—	<7.1>	(4.9)	—	—	6.9	2.3	3	細	強	不連	無	有	—
第17回 20	H14	SD02・3層	—	<9.0>	<5.3>	—	—	<7.8>	2.2	2	細	強	不連	無	有	—
第17回 21	G-H14	SD02・3層	—	<13.2>	5.0	—	—	<4.5>	2.6	—	細	弱	不連	無	—	—
第23回 28	H13	表土	(27.0)	<4.7>	<5.2>	三葉	細	<10.5>	2.8	2	細	弱	不連	無	—	—
第23回 29	H14	表土	(25.5)	<11.3>	<4.2>	一葉	細	<9.5>	2.1	2	細	弱	不連	無	—	—
第23回 30	H14	表土	—	<9.0>	<4.5>	—	細	<6.7>	2.6	3	細	弱	不連	無	—	—
第23回 31	H14	表土	—	<12.0>	<4.3>	三葉	細	<11.0>	2.4	—	細	弱	連續	有	無	—

第IV章 考察

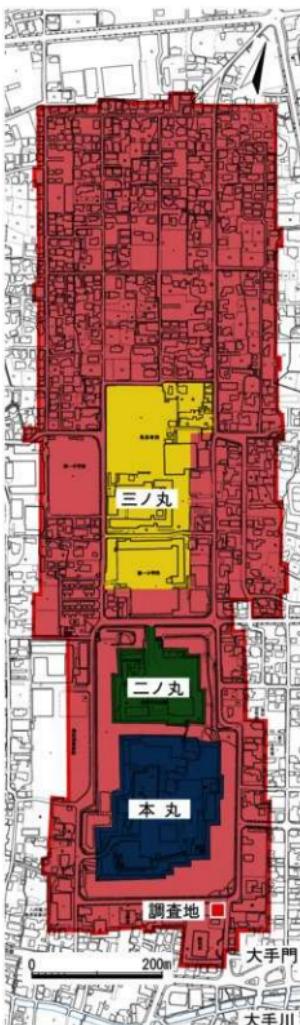
今回の森岳城跡(拘置所宿舎)の調査で確認できた造構は大手門を構成する造構(SW01・SD02)と近世末の普請(土木工事)に関する造構(SD01・SH01~04)の2つに分けられる。以下、各節にわけ考察を行いたい。

第1節 森岳城と大手門枠形虎口 (第24~28図)

森岳城は元和4(1618)年から寛永(1624)年まで約7年の歳月をかけて松倉重政が築城した近世城郭である。この森岳城は通称、島原城とも呼ばれ、明治の魔城に至るまで島原藩の居城として4氏19代にわたり約250年間存続した。城郭の規模は外郭で東西190.5間(約344.8m)、南北660.5間(約1,195.5m)のほぼ長方形で、周囲に7ヶ所の城門と33の平櫓を設け石垣と堀を巡らせており、外郭内部の南側には内郭が設けられ、南から本丸・二ノ丸・三ノ丸を配する。本丸・二ノ丸には堀がそれぞれ巡らされ、本丸と二ノ丸は廊下橋、二ノ丸と三ノ丸は土橋で繋がっていた。本丸には五層の天守閣、その周囲に三重櫓、二重櫓、平櫓、門櫓を各要所に設けていた(第24図)。森岳城における虎口は外郭に大手門、東虎口門、先魁門、田町門、諫早門、桜門、西虎口門の計7ヶ所確認できる⁽¹⁾。その内、外郭の最南端に位置する大手門虎口は右折れの外枠形を呈している。

枠形虎口は村田氏のいうところ、「虎口の防禦施設の一つで、墨を囲って四角くした区画。馬出と共にもっとも発達した虎口の形態である。枠形で防禦した虎口を「枠形虎口」という。大別して虎口の外に造られる外枠形と内に造られる内枠形の二種類があるが、たいていは内枠形である。敵の直進を防ぐことに加え、出撃の際に四角い空間に城兵を待機させる武者溜の機能も果たす。四角い形が樹に似ていることから枠形とよぶという説と、出入りする部隊の人数を樹のように量ることができるから枠形とよぶといふ二つの説がある」(村田1979)とある。枠形虎口は全国的にも数多く確認されているが、外枠形の虎口は少なく、信州松本城大手門、備後福山城大手門、山形城一文字門などにみられる。また、千田氏は「外枠形は虎口星線が一步外へ踏み出し、曲輪の外へ積極的な出撃が可能な形態であることから攻撃重視の虎口と評価できる」(千田1987)としている。森岳城の大手門の場合は絵図(第26・28図)によると、櫓門(一の門)侵入後も右折れ、左折れを繰り返す構造となっており防御にすぐれた虎口の形態をとっているといえる。

今回の調査地はその大手門枠形虎口の北端部に該当する



第24図 森岳城跡範囲図 (S-1/7,500)

第1節 森岳城と大手門枡形虎口

場所である。確認されたSW01の平面形は隅石部分から南方向と西方向に向かって石が配されており、その配置は絵図に描かれている石垣と対応していると思われる。さらに、絵図によると石垣は調査地の南側(現:長崎地方裁判所島原支部の管理地内)へと延びており、その遺構が残存している可能性は高い。その他、SD02に関してはSW01と平行に走っており、次節でふれるSD01埋め戻し後、地表面の雨水を効率よく排水するために設けられた溝ではないかと考えられる。しかし、明治以後、調査地内は建物が建て替わる度に地盤の改変を受けており、城内の道路等近世の生活面は確認できなかった。

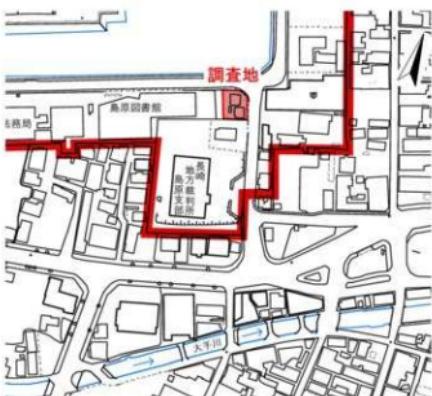
これまで、森岳城の大手門については外郭をなす高石垣が現存していたため、外部構造についてはある程度把握がなされてきた。しかしながら、大手門内部においては発掘調査が行われておらず、絵図等の文献史料により推測するに留まる状況であった。今回確認された遺構は考古学的に文献史料の信憑性を高める一役を担ったと同時に、大手門の内部構造の一端を解明する貴重な資料と位置づけられる。今後、調査を重ねることにより大手門の構造だけでなく森岳城全体の構造の解明がなされていくことを期待したい。



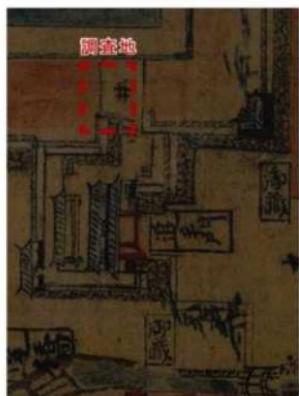
第25図 森岳城跡航空写真(昭和30年代撮影)



第26図 肥前国国嶋原城絵図



第27図 島原市街図



第28図 森岳城図

第2節 水道堀切と石組遺構 (第29~35図)

今回確認されたSD01溝及びSH01~04石組遺構に係わる史料として、肥前島原松平文庫所蔵『弘化五年 嘉永元年ニ成三月十五日改ル 御厩檜 泰安前 水道堀切 石垣御修復控 申正月 冬成』(以下、「石垣御修復控」)がある。この『石垣御修復控』は弘化4(1847)年から嘉永元(1848)年にかけて厩檜下(二ノ丸東側)と岡部泰庵宅前(本丸西側)の石垣修復工事が行われた際の記録である。その記録の中に、石垣修復に伴い堀水を排水するために松平勘解由屋敷(現:島原図書館)前から大手川にかけて「水抜水道」を設けた記録がみられる。

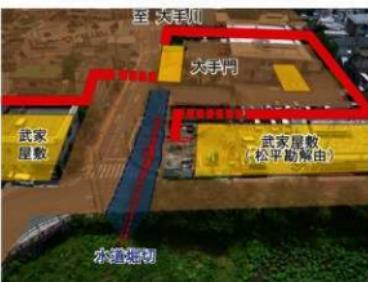
「水抜水道」に係わる主要部分を抜粋していくと、まず弘化4年3月「四貫五百目記 水抜水道堀切板橋四ヶ所(中略)石橋水道勘解由殿前へ出来方等も村夫ニ被仰付(中略)御貯役」(付編P1)があり、周辺村民に普請の布令を出している。その後、同年10月「覚(中略)水抜水道堀切夫九千百人(中略)御普請方」(付編P2)となり、延べ9,100人の村人の動員が要請される。また、同年12月「村夫を繰出し(中略)第一勘解由御屋敷前通水抜水道堀切ニ取掛 出来次第砂地洗崩等之憂無之様(中略)土俵ヲ以水勢を計り、次村々々ニ咄出候様、昼夜となく廻見旁可然奉候(中略)未 十二月」(付編P2)とあり、実際に水道にて排水するに当たり、水量等の監視を課している。そして、石垣修復の終盤にかかる翌年4月10日「十日晴(中略)石工武人水道口築方善助源助」(付編P17)とあり、石工が2人動員されている。同月11日「十一日晴(中略)大手御門水道理方ニ取掛かり」(付編P17)とあり、水道の埋め戻し作業が開始される。同月12日「十二日晴(中略)湯江村出夫百人此造方勘解由殿脇水道口埋方(中略)」(付編P17)と村人を大量動員して埋め戻しが続き、同月21日「廿一日晴(中略)定雇七人 武勿雇拾人 百廿文八人 御用武人 右御門下水道石運控」(付編P18)となり、必要最小限の人員で作業を行ったこの記述が最後となる。



第29図 堀側石垣積み直し箇所図



第30図 堀側暗渠検出状況



第31図 水道・暗渠推定図

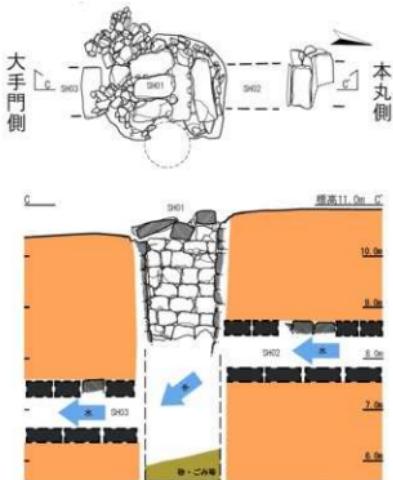


第32図 堀側暗渠内部状況

第2節 水道堀切と石組造構

そこで、今回確認された造構と照合すると、調査地を南北に走るSD01が注目される。このSD01は幅約5m、深さ3m以上あり、その北側延長線上の堀岸には石垣を積み直した痕跡(第28図)が見られ、当初、堀と繋がっていたと考えられる。一方、南側については「一大手外水道有来候、小川ニ而ハ水溢萬一初市等差間候而不相成(中略)坂前登之行當り水溜り六尺四方深サ四五尺ニ為掘取、同所より真南草原通川筋新ニ為掘、大川落候之様手一元評議左様候事」(付編P4)とあり、既存の水道や小川に接続させたようである。また、SD01埋土の出土遺物は多様ではあったが、その下限は19世紀前半のものであるため少なくともSD01は明治以前の造構であることは間違いない。さらに、SD01がある場所は大手門構形虎口の重要な場所であるため、長期に亘り閑渠していたとは考え難く、埋土もほぼ同質の土であるため人為的に短期間で埋められた可能性がある。以上のことから『石垣御修復控』の「松平勘解由殿脇水道」はSD01に該当すると考えられる。

その上で、今度はSH01～03を考慮すると、SH01～03はSD01埋め戻し後堀水の排水等、水位調節を効率的に行うための施設ではないだろうか。残念ながら『石垣御修復控』中に石組等の明確な記述は見当たらないが、嘉永元年4月10日「十日晴(中略)石工式入水道口築方善助源助」(付編P17)と石工が2人動員されたという記述があり、石組の構造物を築く指導的役割の人員であったかもしれません。さらに、今回確認された造構にはSH02と03の接続部にはSH01を設けている。このSH01は石を方形に積み上げた構造で深さ3m以上であり、SH02と比べSH03は約1m深い位置でSH01と接続させている。現代土木においても傾斜地に暗渠を設置する場合に、流水速度を弱めるために段差接合させて、接合部に樹を設置する工法が用いられることがある。恐らくは同理由でこのような段差接合の工法を取ったものであろう。従って、堀から流れ込む水はSH02を通り、一旦SH01の底部にごみや砂等の不純物が沈殿し、SH03から流れ出ると想定され(第33図)。SH01の役割としては暗渠を流れる水の不純物を取り除くための管理点検坑(マンホール)であると考えられる。現在、SH02・03の内部には流水は確認できなかつたが、SH02を延長した堀側の入口では流水が確認できたため、内部の一部で詰まっているのであろう。また、「肥前国嶋原城絵



第33図 石組竪坑及び暗渠推定図



第34図 市道陥没状況(昭和32年撮影)



第35図 市道石組暗渠(昭和59年撮影)

図（第26図）には長方形の構造物、「森岳城図」（第28図）には「井」という表記がみられる。この表記がSH01を示すものであると仮定した場合、SH01内の水は堀水のため飲料水用の井戸とは考えにくいが、SH01は防火用水等の非常用水源である可能性も考えられる。なお、同様構造の事例としては大坂城山里丸の集水槽と排水路がある。集水槽の規模は内法で南北3.9m、東西3mで、底は上面から2.8mの深さで板敷となっており、西壁には2本の水路が接続している。用途としては城内に溜まった水や雨水を一旦この集水槽に溜め、水路を通して堀へと排水する機能を果たしている⁽²⁾。また、SH01のような堅坑はないが、SH02-03の暗渠構造が近い類例として、東京都に松平抵津守上屋敷跡の下水暗渠や神田上水の石樋等水利施設等がある。特に松平抵津守上屋敷跡の下水暗渠について屋敷内の池の水を川へ排水する目的で設けられた石組暗渠が延長53m確認されている。その構造は底石・壁面の石垣3段・蓋石からなり、断面形状は内法幅63cm、高さ88.8cmの長方形である⁽³⁾。

その他、追加資料として第34・35図を掲載する。第34図は昭和32（1957）年の集中豪雨（諫早水害）時、調査地北側の市道が陥没した状況の写真である。これは恐らくSD01水路部分の地盤が弱いために土砂が流出、陥没したものと推測できる。また、第35図は昭和59（1984）年調査地東側の市道工事の際に、今回確認された石組暗渠とは別の石組暗渠の写真である。遺構の詳細な性格や関連性については今後の調査課題であるが、SH02-03と形状が酷似しており水路であることは間違いない。さらに、同じ『石垣御修復控』に「一今日深江村夫候而勘解由殿前埋立水道堀地候事、此已前堀方ニ相成候場所より東ニ寄水道有之、此已前ハ堀出セ申候しからみ等ニ而水道防キ候事」（付録P5）と既存の水道に関する記述もあり、この暗渠は既存の水道の一つであると考えられる。

最後に、今回の調査成果は『石垣御修復控』にみられる様相が、実際に遺構として確認されたことで考古学的に証明され、文献史料の信頼性及びの近世の土木技術を解明する基礎資料となった。今後、調査の積み重ねにより大手門橋形虎口だけでなく森岳城全体の様相把握に繋がることを期待したい。

【給図】

第26図 国立国会図書館所蔵【日本古城地図】西海道之部(1)3222前国崎原城絵図 江戸中期から末期写

第28図 八幡神社所蔵森岳城図 宽政4(1792)年から文政2(1812)年の間に作成と推定される

【註】

(1)林賛古編 1954 『島原半島史』長崎県高来郡教育会

(2)市川創 2012 『大坂城の集水槽』『革火』157号財团法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所

(3)東京都下水道局・新宿区No.102改築調査団編 1998 『東京都新宿区松平抵津守上屋敷跡下水暗渠：新宿区荒木町付近再構築工事No.3立坑施工に伴う発掘調査報告書』

【引用・参考文献】

本田秀樹・竹中哲朗・川口洋平・東貴之 2002 『森岳城跡－県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』長崎県文化財調査報告書 第166集

本田秀樹・本多和典 2003 『森岳城跡II－県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』長崎県文化財調査報告書 第173集

土橋啓介 2006 『森岳城跡－島原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財調査報告－』島原市文化財調査報告書 第11集

川口洋平・袖木亜貴子 2004 『長崎奉行所(立山役所)跡・炉押町遺跡－歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(上)－』長崎県文化財調査報告書 第177集

村田修三 1981 『橋形』『日本城郭大系 別巻2 城郭研究便覧』新人物往来社

千田嘉博 1987 『織豊系城郭の構造－虎口プランによる縦張編年の試み』『史林』第70巻第2号史学研究会

山上雅弘 2008 『橋形虎口』『季刊考古学』第103号

三浦正幸監修 2006 『図説・城造りのすべて』学習研究社

追川吉生 2008 『江戸のなりたち[3] 江戸のライフライン』新泉社

大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー-55 ニューサイエンス社

山崎信二 2012 『瓦が語る日本史－中世寺院から近世城郭まで』吉川弘文館

江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房

写 真 図 版



01. 調査地全景(北から)



02. 調査地全景(俯瞰)



03. 調査地全景(俯瞰)



04. SW01完掘(北東から)



05. SW01完掘(北から)



06. SW01完掘(東から)



07. SW01完掘(東から)



08. SD01検出(北から)



09. SD01完掘(北から)



10. SD01遺物(西から)



11. SD02完掘(南から)



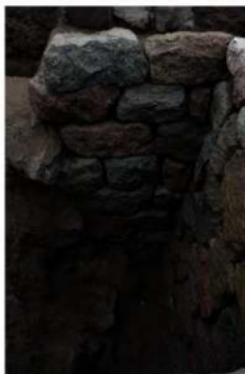
12. SH01～04合成(俯瞰)



13. SH01検出(東から)



14. SH01蓋石除去後(東から)



15. SH01南壁(北から)



16. SH01西壁(東から)



17. SH01北壁(南から)



18. SH01東壁(西から)



19. SH01遺物(南から)



20. SH01遺物(南から)



21. SH02完掘(西から)



22. SH02内部(北から)



23. SH02内部(南から)



24. SH03完掘(北から)



25. SH03内部(北から)



26. SH03内部(南から)



27. SH04完掘(南から)



28. SH04完掘(東から)

写真図版 6



写真図版29(本文挿図番号)

- | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1:第11図1 | 2:第11図2 | 3:第11図3 | 4:第11図4 | 5:第13図5 | 6:第13図6 | 7:第13図7 | 8:第13図8 |
| 9:第13図9 | 10:第13図10 | 11:第13図11 | 12:第13図12 | 13:第13図13 | 14:第13図14 | 15:第13図15 | 16:第13図16 |
| 17:第13図17 | 18:第13図18 | 19:第13図19 | 20:第13図20 | 21:第13図21 | 22:第13図22 | 23:第13図23 | 24:第13図24 |
| 25:第13図25 | 26:第13図26 | 27:第13図27 | 28:第17図28 | 29:第17図29 | 30:第17図30 | 31:第17図31 | 32:第17図32 |

29. 出土遺物①



写真図版30(本文挿図番号)

- 33:第17図33 34:第17図34 35:第17図35 36:第17図36 37:第17図37 38:第21図38 39:第21図39 40:第21図40
 41:第21図41 42:第21図42 43:第21図43 44:第21図44 45:第22図45 46:第22図46 47:第22図47 48:第22図48
 49:第22図49 50:第22図50

30. 出土遺物②



写真図版31(本文挿図番号)

- | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1:第14図1 | 2:第14図2 | 3:第14図3 | 4:第14図4 | 5:第15図5 | 6:第15図6 | 7:第15図7 | 8:第15図8 |
| 9:第17図14 | 10:第17図15 | 11:第17図16 | 12:第17図17 | 13:第17図18 | 14:第17図19 | 15:第21図22 | 16:第23図23 |
| 17:第23図24 | 18:第23図25 | 19:第23図26 | 20:第23図27 | 21:第15図9 | 22:第15図10 | 23:第15図11 | 24:第15図12 |
| 25:第17図20 | 26:第17図21 | 27:第23図28 | 28:第23図29 | 29:第23図30 | 30:第23図31 | 31:第23図32 | 32:第23図33 |

31. 出土遺物③

石垣御修復繪

得共、■■此節迄未■と全快不仕趣二御座候、然処農
方も専ら同敷時分二付、去兼而寢民之趣二御座候得は、
種々之物人等仕向共歎敷義二御座候間、何卒書面之通

御申■數郎仕下ぬ我右如
披旁■候仕候「仁」之教者
何歎も人處人者は御札
卒敷■中二、御鐵三、御百部
書引歌■面二組取組面五被
面二組取組面元祖無
御候合勤者へ、號大勝め置
通座後は病は而■下御記候
被候もり假子程村五音
下处下家■々々宿請山住
仕「内々て向五療へ出田出度
候先之交換六用連出寸夫才
様例歩代々人相越深之、
仕も行仕難い事也か■サ者仕段
度御會肴相附へ柴一太申
此座へ■者暮立原寸前帝郎上
段候難致之、日立余空
御申二儀農益趣農敷等も荷
塙上付屋次連日廢さ候
掛候、先付付候處也も相手強
以當是不へ下石浦源留候強居
役上為及諸請

弘化五年
次戊申正月
嘉永改元
御城御修
修理一件
調印冬成控

一
山田村川床住太郎怪我
六十九
膏藥長八寸横三寸
六七
武老毛忽勿三分
六分
忽勿五分
八分
ふく
紙蠟座土紙硯玉子■
燭藻ミ
一本

右は先頃中御鑰石垣人用沖島より石杉取候節相用候古船拵方致候三付此段申上候、以上
一六月十八日 挂り役人

同十人 士練八丁水一人 ■
右御用之もの石工手伝石運仕事
酒江村出夫四人、此遣方根切浅井石工手伝、御
代村出夫四人

書面虎藏義、此度御本丸兩側石垣御築立ニ付而ハ御
物入奉恐察、書面之通為冥加寸志差上度願出、甚奇
特之義ニ御座候御受物御座候様仕度、尤御賞美之

十黒村出夫百拾六人 此遣方胴込人石荷運扣へ御酒
御番人岩木本左衛門・庄屋・乙名罷出候 御買入然内處
土井居巻皮八百六十六枚 御買入然内處 番皮二六ヶ敷厚

書面に通願し出奇特之義三付、御聞済相成可然奉存候。以上
御駕やくら ■■■ 仕事

石井垣等凡有合會日請候方御酒被下之處、今日被下人奉行ケ二人三人

原村夫之義も御褒美被下、湯江村へ御酒温純代十勿島
職原村へ御酒温純代々勿今日被下取計方と■へり
大工人御用定付酉代九勿
大工人御用定付酉代九勿

石川金左衛門殿
寸志り役々當之通
羅大工武人 滋古氏人 同のミ
大工武人 司人寸志出
大工武人 同のミ
寸志出

定属拾三人
此内訳 橋すの 一百四人 石工
多比良村出夫 百人六人 此遣方石垣手伝石引寄

御用賄老人酒四合毫忽一分酒毫斗九升八合

御用三事定升
別見毛利家子
一札九百目記
右は大手御門下通水道六尺程石運二出来凡積り御座

廿九日 晴 石川金左衛門殿
平井伴助殿 八ツ後小林三郎兵衛殿
掛り役々御代官二人

御普請方
掛り役々拾武人

御手大工老式人
稽古出式人
抱定雇九老人
武勿雇八人
石志工人
百廿五人
雇石五工
寸志大工四人
御櫓仕事

御用式人押練一人内一人八十文
寸志出弥左衛門

下紙中
下寸志上之酒也御座候付割合二付被下置候而
然昇代百代亭出幕出掌等有之候次一升

御殿構造初ニ成ル
四月朔日

御隨役

掛り役おとしやく志太工四人 同石工式人 弥左衛門
大工二人 稽古出二人 のミ 稽古出のミ
御用 檜御用

三石工兵左衛門 善助三郎右衛門 龍壯候
三代藏面市郎右衛門
覺兵衛 嘉左衛門 源之助 德左衛門 松太郎 平次兵衛
兵左衛門 善助

築立定雇八人
武勿九人
内十六人
百廿七人
御櫓仕事人
此遣方嗣込石運石運
八ツ後忠右衛門殿
中木場村夫九十四人

好左衛門
小月廿八日石工好左衛門怪我致玄洞方々療治差遣候
小林三郎兵衛殿八ツ後
石工大工定雇凡六十一人出精二村、老斗八升被下

以書付奉願候御事
酒十二丁立虎藏
者湊居兼而田屋島原市
比菟御本丸阿則石豆御座
立二付而ハ莫太之御座候

平井伴助殿
掛志役大工四人
日 晴
三
星長谷利大夫殿
司石工武人
同前左衛門
夕

人之義と奉恐察之。聊御座候得共書面之通為冥加寸志。差上度以願出申候間、何卒右顧之通相叶候。模幾過二も宜被仰上可被下候、以上之名仁義者人

不快二付断人
稽古出二人
雇大工武人
抱大工老人
嘉左衛門人
雇石工八人
人
人
人
人

申三月
御役人
御代官當

定雇十一人
內檐仕事廿六人
百廿文十一人

右取石工十式人 同手伝七人

定雇山三夫村酒太夫人 銀用武人

御酒

平井伴助

兵衛殿

平井付被下候

候

三月朔日

晴

松尾真八郎殿

夕長谷利太夫殿

平野部敬助

兵衛殿

平井平助

兵衛殿

平井付被下候

候

西早引天官

平野部敬助

兵衛殿

平井付被下候

候

石次郎方愛郎

兵衛殿

同手伝七人

人御用

御酒

山川渡

兵衛殿

同手伝七人

人御用

上石工二

中石工二

友助労
作業

下石工二

右之通位上申達ス

八朝松尾十郎ノツ時進殿御立四ツ時分候出

四日暴小林五郎殿

兵衛殿御代廿序日二御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

御田代良平殿

御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

御田代良平殿

仰上可被下候 以上
申月

中村常右衛門
多治平治
松尾敬郎左衛門

吉下清久兵衛門

寺崎銀治

同番同人屋

右之通位上申達ス

八朝松尾十郎ノツ時進殿御立四ツ時分候出

四日暴小林五郎殿

兵衛殿御代廿序日二御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

右之通位上申達ス

八朝松尾十郎ノツ時進殿御立四ツ時分候出

四日暴小林五郎殿

兵衛殿御代廿序日二御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

右之通位上申達ス

八朝松尾十郎ノツ時進殿御立四ツ時分候出

四日暴小林五郎殿

兵衛殿御代廿序日二御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

右之通位上申達ス

八朝松尾十郎ノツ時進殿御立四ツ時分候出

四日暴小林五郎殿

兵衛殿御代廿序日二御立番段寄有之候事

御佐野石原原主御立番段寄有之候事

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

夕朝松尾真八郎殿

御田代良平殿

兵衛門殿

夕朝松尾真八郎殿

廿五日 晴
長城下石垣築立之筋は右居始御酒被下無理ニ様奉存候
書付老人

同式為
二又ツ
同宅五分ツ
同宅五分ツ
當用廿三人
石手代廿九人
御用二人
御座候

別紙之通申出、今日波登石居手始
段被下置候様仕度、此段申上候
二月 摂り役々
合四人 御普請奉行

春杖啓石今場所六石五時定領御用立津御龍兵斗三千被懸下
■突厥進兵被次兵斬死怪我いたるは出頭願二付一柴原玄洞方々
廿九日付二進途断候り同人方へ療治罷越候
三十日付二時上り石工増左衛門

西畠義定・田森正助・平助
手代中島源朝・伊藤松下・岩本
佐野右方・喜八郎・伊藤立石・
小野喜一郎・手伝宅人
御用二十人、御酒五斗八升

一札老貫六百自宛

置候間、此段御門方へ御沙汰可被下候、以上

二丸小屋進

一札老貫三百五拾目宛

一休息小間開泰部泰庵前志様

一右内田茂兵衛

一右差武石運付し、からみ入用竹木代御用共差引

一同但柱間半梁十五間御門内間十三間ニ作

一佐野本泉藏

一右口金之津村へ有之候ニ付、三代代藏越調被拂候

一御壇石垣御普請ニ付、明廿日より冲ノ島石取差遣候

一右八郎

一右差武石運付し、からみ入用竹木代御用共差引

一右見ケタ人御役所役の御勝手方より六十節相

一右足五拾人

一右舟合大工龜松、太吉呼出、大手手下三面取候

一右見ケタ人御役所役の御勝手方より六十節相

一右足五拾人

石垣御修復控

被仰付、日之出存夫遣支配仕、其条之義被相見申候、此度之義も同様相心得可申候哉

一 沖之島石取之義ハ、御城下井村町石工之内成丈巧者
之もの相撰、石垣築立迄掛切ニ仕置、同手伝之義も
兼而家業に就く者井石重島石積取方等二相副候ものを

一築方取掛候上ハ怪我人等出来候程難計ニ付、差配之向銘々氣付、疵業等は夫々所持可仕候得共、すへ手

始
候但終此掛切三手方存候
奉間刻三手方存候
存候石場長藏之
候矢石義弁ハ利ハ
八年築立村相
内より候例ノ以二而奉存候
意仕置候義も御傳
候年內可申度

奉存候
十二月

一札五拾六貫六百八拾八匁

六 貢式百目
一但御殿櫈石垣并泰廟前石垣築立石工質

但右二ヶ所石運築立人夫并水抜水道掘
人夫寺米九合甃石石眼一目皆、尤石

武治第七埠頭有御座候

合實休但看同所繫立道接并相接信
六百目式棟出來人用共
林才其外

但御殿櫓式間梁拾式間新土建繩瓦連方
右諸人用相積御座候以上

一先年勘解由殿屋敷前通石運水道積見数六
内沢

道巾城石垣三尺
四寸五分

同勘解由殿前陸地之分八間
所より南石垣下迄六間
四尺

御門下四間

右稿并指圖面之義注別紙助帖二卷
一先年割場長屋石垣御修復之節援助人夫扣

定國上正三司批行
代六百四拾三匁八分

代百五拾三匁三分裏
小御用五百拾毫人
文百六拾四匁分

一町大工五人半
代廿三匁六分五厘

一九官半人代式勿毫分五厘

右は人夫手間代計に此外板橋三ヶ所手端板入用品々有
之候事度堀切二付、勘解由殿前石運水道板候而ハ如何之
談候付 積井図面差加候

但此掘方諸道具之義、兼而御役所御有合之内ヲ相
用不足之品或ハ損有之品は當年より夫ニ取調相
備置其外竹木檻立板橋三ヶ所入用等も同様用意
仕置候義ニ御座候

第一勘解由殿御屋敷前通水抜水道堀切二取排、堀方出来次第砂地洗崩等之憂無之様先年之通り猫太井樋櫃等を以丈夫水道樋櫃水口石垣取外シ、土俵ヲ以水桶等充て候様、昼夜となく廻見旁午可矣

但此休息小屋スケ所は、泰庵前宅ヶ所ニ丸内鉄御門之下、當時有來候小家手狭二付、建継可仕奉奉候。此人用竹木等は当年より用意仕置候義ニ御座候。未出アリテハ、形皆體付自治。丁甲ニ目所詔候。

候二付 左之差出候
明早春より農隙日以御普請御取掛ニ相成候二付而
ハ、いつれも年月十一日後御役所相始次第休息小屋式
ケ所早々達方仕可奉存候

等が見得て、御手取候事。右の如きは、御手取候事の御名前を記すもので、此分名の方左取候事。此度御砦石垣御普請候付、仕様子控委敷認差出候様。左候ハ郡方御勝手方御滞ニも差出候様。此十二月方中御奉行衆より被仰取候間。

十一月十三日 沖ノ島石見分五ツ半時より出宅、三
左衛門、兵衛殿、忠右衛門殿、金左衛門殿、良平、源吉、
銀泉、手代、庄右衛門、島原前々右郎御番大助夫、庄屋助
左衛門、乙名伊八郎、右段々南天島小南行、庄屋助、
禮郎、兵衛殿、忠右衛門殿、金左衛門殿、良平、源吉、

五月
右書状之通夫積郡方承知掛候義ハ、追面相伺可申付と聞書面■御掛右
御普請方
爾方より答有之候旨忠右衛門殿被申聞書面■御掛右
爾門殿へ上ル

御代官掛之義ハ、先例之通被仰付候様仕度、其余之申義ハ、都而人用之品物等と申談候様可仕御代官掛被仰付候事存候、以上

二而ハ水抜堀切之義也。此前之通と御座候得は、崩込上候方より心得申候。人夫高宅万式千五百四百八拾人外ニ武百四拾人積違三而石取上候方より心得申候。此間は、都合毫万式千七百八拾人又相成候。此遣方は、崩込达石は、其假ニ而、惣而干冲ノ島百五十六人也。

被仰付、日之出存夫遣支配仕、其条之義被相見申候、此度之義も同様相心得可申候哉、
水道掘切井崩込石取揚等之廢は、四印三者書取之通
郡方申出と相見候

『石垣御修復控』

一、紙幣の都合上、「一連」の文章については、原文どおりの改行はしなかった。また、原文で敬意を表すために改行する場合は、同じく敬意を表すために一字明ける漢字に改めた。

石垣御修復計

・変体仮名は、原則としてひらがなに改めた。ただし「面」(「べ」)は原文のままとした。

・「墨書き(墨り返し記号)」は、漢字は「々」。平假名は「メ」で示した。

・「墨書きによる捺消は」――(二重抹消線)で示した。

・「源氏・脱字などで文意が通しない場合は」(カ)や(ママ)で傍注を付した。

・「細則者が加えた文には」()を付した。

・「判読できなかつた文字は■で示した。

・「細則は吉田信也(肥前原島松平文庫芸芸員)が担当した。

御本丸石垣築立之義、當春は近々妻刈入田方控付二付、明春御普請諸候。奉存候。御塙石垣、早来眷村夫ヲ以御築立二相成候段、御沙汰奉存候。一
四月奉
御忠右衛門丈門被申候候、水道塙引井崩落等之廉
度之處、早々御相見着し不申候、左な在所下而ハ懇意御下に方相場相分兼候と申候。御築立之節は代候三人掛
御御本丸石垣築立之義、當春は近々妻刈入田方控付二付、明春御普請諸候。奉存候。御塙石垣、早来眷村夫ヲ以御築立二相成候段、御沙汰奉存候。一
四月奉
御忠右衛門丈門被申候候、水道塙引井崩落等之廉
度之處、早々御相見着し不申候、左な在所下而ハ懇意御下に方相場相分兼候と申候。御築立之節は代候三人掛

報告書抄録

ふりがな	もりたけじょうあと							
書名	森岳城跡 IV							
副書名	島原拘置支所宿舎建設に伴う発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	宇土靖之 堤浩一朗							
編集機関	島原市教育委員会							
所在地	〒859-1492 長崎県島原市有明町大三東戊1327番地 TEL 0957-68-5473							
発行年月	西暦2015年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりたけじょうあと 森岳城跡	長崎県島原市 城内一丁目 1195番地4	42203	3	32° 47' 18"	130° 22' 07"	20140520～ 20140711	225m ²	島原拘置所宿舎建設に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
森岳城跡	城跡	近世	石垣 溝 石組遺構		陶磁器 瓦 古銭		森岳城大手門 枡形虎口の一部	

島原市文化財調査報告書 第15集

森岳城跡IV

-島原拘置支所宿舎建設に伴う発掘調査報告-

発行月 平成27(2015)年3月

編集・発行 島原市教育委員会
島原市有明町大三東戸1327
TEL 0957(68)5473

印刷 大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
TEL 0952(71)8520

